本郷	一三六、七四九	〃	一三八、七四四	一〇二
下谷	一七三、九七三	〃	一七二、九〇六	九九
浅草	二四一、六七四	〃	二四〇、五一二	九九
本所	二三五、二五七	〃	二三九、五七四	一〇二
深川	一七六、七七六	〃	一七八、五一五	九八
新市部	二、八八八、六七四	〃	二、六〇八、六八四	九〇
品川	一七九、四九六	〃	一六八、三七六	九四
目黒	一〇七、五二九	〃	九四、三八三	八八
荏原	一三二、一〇三	〃	一〇九、〇四九	八三
大森	一四七、三三五	〃	一三一、四八五	八九
蒲田	九八、一二二	〃	八七、四二八	八九
世田谷	一三〇、二八八	〃	一一三、七九九	八七
澁谷	二一三、〇三八	〃	一八九、〇七二	八九
淀橋	一五三、五〇二	〃	一四三、一四五	九三
中野	一三一、一五一	〃	一〇九、二一五	八三
杉並	一三四、四三六	〃	一一〇、三一六	八二
豐島	二三五、〇〇四	〃	二一〇、四九二	九〇
瀧野川	一〇〇、七四六	〃	八六、三五六	八六
荒川	二八〇、五二六	〃	二六〇、〇二四	九三
王子	一二五、六七七	〃	一一二、九八六	九〇

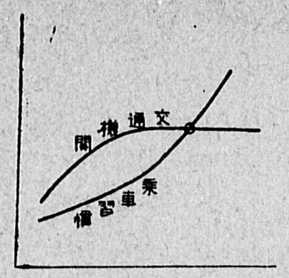
東京市舊市内各區の人口を千として見る宿泊人口及びその增加率（昭和七、八、九年）

區名	七年度千人當り宿泊人	八年度千人當り宿泊人	七年度を一〇〇としたる八年度の比率	九年度千人當り宿泊人	七年度を一〇〇としたる九年度の比率
板橋	一一三、四九〇	〃	一〇八、五三〇	〃	九五
足立	一二七、五〇七	〃	一二〇、二九六	〃	九五
向島	一五五、五一九	〃	一四八、二六九	〃	九六
城東	一四二、九七一	〃	一三七、九八七	〃	九六
葛飾	八三、二五八	〃	七七、六〇一	〃	九三
江戸川	九六、九七一	〃	八九、八七五	〃	九三
麴町	一・七	一・七	一〇〇	二・〇	一一八
神田	二・〇	一・八	九〇	一・七	八五
日本橋	一・二	一・二	一〇〇	一・二	一〇〇
京橋	〇・五	〇・五	一〇〇	〇・六	一二〇
芝	〇・五	〇・六	一二〇	〇・七	一四〇
麻布	〇・一五	〇・一五	一〇〇	〇・二	一三三
赤坂	〇・二	〇・三	一五〇	〇・二	一〇〇
四谷	一・三	一・四	一〇八	〇・七	五四
牛込	〇・一	〇・一	一〇〇	〇・九	九〇〇
小石川	〇・二	〇・一五	七五	〇・五	二五〇
本郷	〇・六	〇・七	一一六	〇・九	一五〇
下谷	二・九	三・六	一二四	四・〇	一四〇

淺草	二・八	二・七	九六	二・七	九六
本所	一・四	一・二	八五	一・三	九三
深川	一・〇	〇・八	八〇	〇・八	八〇

即、都心部晝間人口は倍増し刻々その部の密度を無際限に高めるのみならず、此の晝夜間の人口の差は市民活動指數の上昇と共に都市部に向けの市民の乗車習慣を増加せしめる一方となる。

乗車習慣＝（交通機關數、機能配置、市民活動等の函數）



第一五一圖

市民數

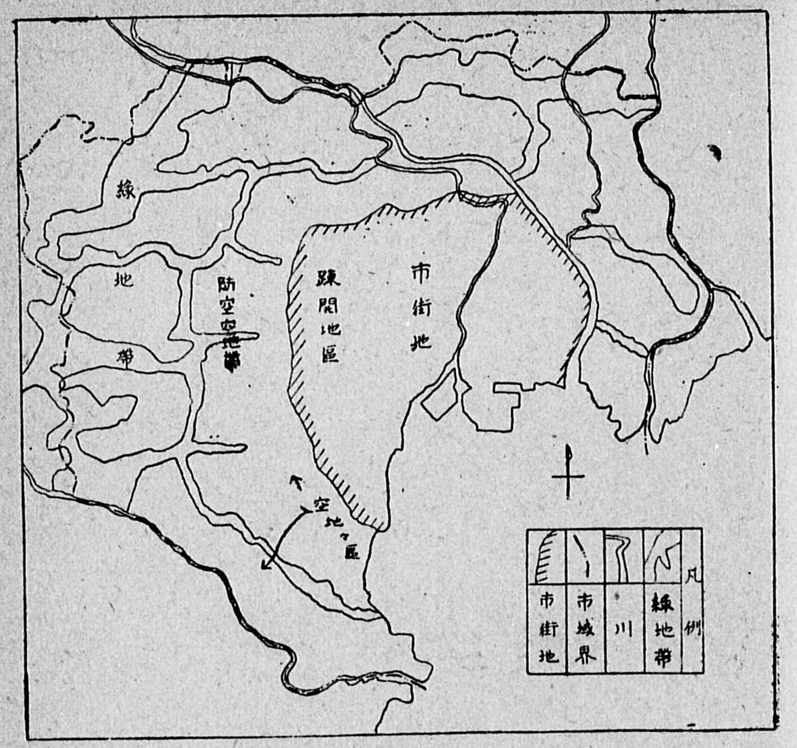
然るに一方都心部交通機關の構成は大東京に於ては頗る不備である。鐵道は增幅不可能であり、地下鐵完備の時期の見通しはつかない。道路は到る所に隘路があり、特に京濱聯絡は充分でない。

あまつさへ、自動車は著しく減量されて居る。從つて此の交通機關と乗車習慣のカーブは必ずいつしか圖の如く切る事になる。

之れは恐らく戰後と雖も可成りの長年時に亙つて覺悟しなければならない事態である。之れ等はいづれも何とか處置する必要がある。

乙、採られたる處置

以上の如き狀態に對し、防空上の立場から既に工業及び學校規制地區が決定され、更に都市計畫上の諸處置が採られた。



第一五二圖　大東京の國土計畫的處理

工業規制
學校規制
緑地帯
防空々地帯
空地々區
都市計畫

それ等は圖の如く組み立てられて居るわけである。

併しながら之れでは、現狀人口を如何ともなし難い。又都市活動の形式もいさゝかも是正されてない。こゝに何とか可能にして有效なる方策が考へられなければならない事になる。

丙、採らる可き處置

（一）都市造型

よつて採らる可き處置を都市整型及び交通問題に分けて見れば、先づ都市整型の方では

中樞部の疎開
工業地域の强化・再構
文教都市美の保護
郊外ブロックの建設

と云ふ樣な事があらう。

中樞部の疎開計畫は、空地地區の適用及び防空ブロックの構成と云ふ樣な形を採る。前者については云ふ迄もなく必要ある機能中心については必要人口密度を許し、他の部分に於ては人口密度を嚴にし、その結果がせめて蔬菜自給に迄は近づき得る樣にせんとするのである。

之れは但し現存家屋に大改造を要する時期が來るか、然らずむば大災禍が有つた後でなければ實現しにくい。しかもそれはあく迄人口密度計畫であつて、都市內容に迄入つたものでない。そこで防空帶による整型計畫と云ふ樣なものが前面に出て來る。

之れによれば東京は百粁內外の幅員の廣路によつて一―二粁ブロックに縱橫斷される。その結果は

防火帶を挿入された許りでなく
防空活動（避難も入れて）上の據點を有つ事になり
併せて兎角心理的に混迷し易すく結合力を有たない市民生活が隣保單位化され得る。

尤も之は單に上記の樣な總括的な整型工作に用ひられる許りでなく

重要施設に對する取附道路
通過性重要交通路

等にも役立つ樣配せられる事にもなる。

又、之れ等の縱橫構の中央部に神社、學校、區役所その他の公共施設を中心にした空地島を設ければ、ブロックの精神效果はいよいよ大きく、防空上の强度を增す事になる。尤も此の防空帶については實現の時期が問題ではある。

之れを資源充備した戰後の仕事とすれば、之れは直に規範計畫に隨してしまふ。さればと云つて之れを全局的に現實計畫と考へるには世情いさゝか抵抗が多い。よつて之れを次の如く考へる。

防空上の重要地帶に對しては斷行する。

規範計畫として存し置き、あらゆる機會に多少なり共前進する樣に計らふ。

不幸災禍があり復興事業を必要とする時は之れに從ふ。

尤も之れに對しては空襲必至の覺悟を固め、「このまゝ災禍をうけ復興事業と爲す」事の餘りに巨費なるを悟り、都民をして事前に斷行する考へに至らしめるのが正道である事云ふ迄もない。勿論、此の場合之れを事前に斷行するにしても、之れを直ちに道路とする必要はない。

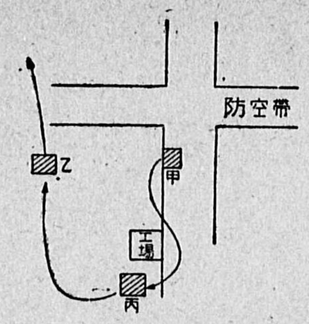
之れを當分畑地とし、市中を縱橫に走らしめれば、市民の蔬菜供給地ともなるのである。唯そこに起る心配は

（イ）移設による家屋の損耗
（ロ）此に要する勞力及び運搬力の不足。
（ハ）此の爲に東京の必要とする人口を失ふ事になり易い。

之れ等の中イに對しては、その種の事業の專門經營者を養成して行はしめる。之れは工夫によつては必ずしも全面的に

家屋が損耗するとは限らない。

又勞力運搬力については、ドイツ、蘇聯等の自動車國道乃至モスコウの地下鐵事業等例による迄もなく、帝都の護りは帝都都民の光榮ある事業であるとして、都民日夜の愛國愛都の努力にまてば、容易に出來上る性質のものである。尙、之れに防空稅と云つた樣なものでも加へれば、更に財政上の心配も輕減されて來る事になる。



甲は工場通勤者
乙は不用人口
丙は必ずしも必要な人口
丙の所場もしくは工場に必要な人口

第一五三圖

唯問題はハである。此の防空帶內の失ふべき人口が必しも大東京の爲に不必要な人口のみとは限らない。そこで自からそこに日帶內の人口と、大東京全面に於ける不用人口との住みかへの問題が起る。蓋し之れは大事業であるが此も都民の强き覺悟を以つて斷じて行へば行へない事はない筈である。

尤も此の爲には上圖乙なる不用人口を東京外に移し、丙を乙にその後に甲を移すに要する勞はある。

よつて先づ何より

防空帶內要人口＝區域內不用人口（乙）

（甲）

なる事が望ましく、その乙が甲に近い程マイナスが少なくなるわけである。而して之れ等の場合最も問題となるのは結局區域內不用人口の撰定である。

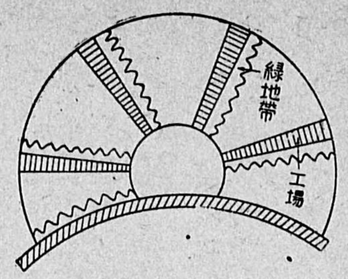
不用人口の撰定については次の樣な考へ方が存し得る事になる。

企業整備に伴ふ人口

順次轉出し得る可動工業人口、機械工業人口

收入ある無業者等。

次は工業地域の再構の構想であるが、（此の際既に東京にて經營中の工場が、災後の復興工場を地方に求める事も考へられるが、再構問題としては東京規制區域內に於ける再配置を捉へる。）その爲には



第一五四圖

東京と日常關係深き工場は衛星都市へ

現存の東京工業力と直に絕緣出來ぬ工場も衛星都市へ

現在の工場と關聯を保ちつゝ擴張したき工場は臨港埋立地へ

何としても東京になければならぬが但し臨港區域にある必要もない工場は郊外ブロックの中へ

と云ふ樣な事が考へられる。

此の結果は自から海岸に沿ふ帶狀工業地帶及び郊外工場ブロックの構想になるのである。

（二）交通計畫

（甲）市內部

都市計畫區域內に於ける交通計畫の「爲すべき」仕事は市內部、郊外部に分けて考へられる。市內部に關しては總て國土計畫的な高度な負價値でなく、むしろ低下しつゝある交通能率を如何に高めるかと云ふ程度の所にある。そこで現在區

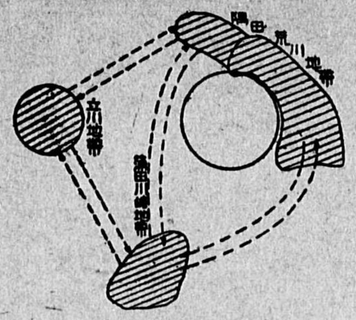
域内に内在する問題を拾へば次の樣な事がある。

都市内容と道路系統のヅレ

工業區域の偏倚

中樞部、交通能率の低落

郊外、市中交通機關聯絡の不備



第一五五圖

（イ）都市内容と道路系統ヅレについては――現在大東京の道路系統は前述の如く大體に於て江戸の街路網の補正である。即ち之を具に觀察すれば江戸が政治中心として江戸城、經濟中心として神田、日本橋を撰び、之れを中心に放射系のものを組んで居た事が解る。

然るに今日東京の都心は

工業は江東及び蒲田川崎に擴がり經濟中心は日本橋京橋の關へ移つた。

又行政の中心は霞關及び丸ノ内になつて居る。

かく江戸の都市活動の中心が總て移動した場合、舊系統の街路網が役立つ筈がない。その最も著しき例として

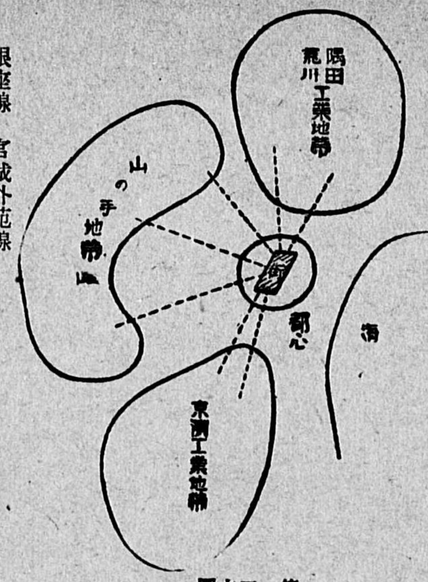
山の手線街路の中北半部は神田に南半部は總て宮城の各門に終る形をとつて居る。

此は當然今日としては少くも南半部は京橋區南部に向けなくてはならない。

或は新宿、澁谷については神田方面と、池袋上野方面は芝方面との聯絡を必要とするかも知れない。

兎まれ此れ等の矛盾が總て今日の交通支障となつて居るのである。

（ロ）第二の重要問題は特に最近の現象として在來の隅田、荒川地域の工業地域に對し蒲田、川崎、鶴見の工業地及び立川一帶の發達を見た。之れは當然旺盛な交通を呼び起して居るが、之れに對しては當然求心的發達を遂げた街路網では何の便宜を與へ得る筈がない。



第一五六圖

當然それは便宜ルートにより不便を忍びつゝの連絡を採つてるに過ぎない。之れは工業自體に對しマイナスである許りでなく、ひいては都市交通一般に與へる支障も大きい。

（ハ）中樞部交通能率の低落

之れは以上第二の問題とも關聯するのであるが、都心を中心としての交通の低落である。即今日都心部の南北貫通重要線で自由に働き得るのは

日比谷線　昭和通線

であり、之れに對し

銀座線　宮城外苑線

はトラックは空車ならざるもののみの交通を許して居る。

此の實に僅少な交通線に對して、都心を中心とする交通源たる區域は前述の如く展開してる。此の結果は自から圖の如き交通隘路を生ずる樣になる。之れは今後年々その支障度を高めて行くにきまつて居る。

（二）郊外市中の交通機關聯絡の不備は、市中人口の郊外分散に非常な支障となつてる。その結果がいかなる問題となるかは圖の時間帶に判然と顯はれる。即ち總べての方向に於て連絡よき省線のみが群を拔いた成績を示し他は杳に不利である。

又今日郊外の發達に支障となつてる一つはその都心に對する放射的な交通系統のみが發達し相互の聯絡たる環狀交通が跛曲してる事である。

之れ等の現實を處理する根本策としては都市內容的に先づ「立川」「隅田、荒川」「蒲田、川崎」夫々の工業の區域內の工業經營を一貫化する事である。

次で都心の神田移動が考へられるが。然し之れは云ふべくして今日の問題でなく極力「その方向に導く」と云ふに盡きる。今日可能なる問題にして特に市中に適用出來るのは

重線定立　微材事業の勵行　交通整理　交通調整

等の方策であらう。

（イ）重線定立

先づ總ての前に重要なる交通線を認定し、之れを結ぶべき交通重線の方向を定立しなければならない。之れは市中の樣に交通線が無數に亂雜してる時、最も必要にして有效な方法である。尤も之れは各路線毎に量價すると云ふのでなく都市各地帶につき重要交通「方向」を決定し、且それが決定したら、總ての事業を之れに集中すると云ふ方法を採るのである。

そこで先づ重線の先決であるが、これを一般重線及工業重線に分ける。

工業重線は前述の大工業地帶の直結。一般重線は市中各重要交通源點を押へ直結する。例へば前說の如く

池袋、上野等の芝區聯絡

新宿、澁谷の神田聯絡

東京港と全市聯絡（但し都心貫通をさける）

と云ふ樣な事が取りあへず考へられる。

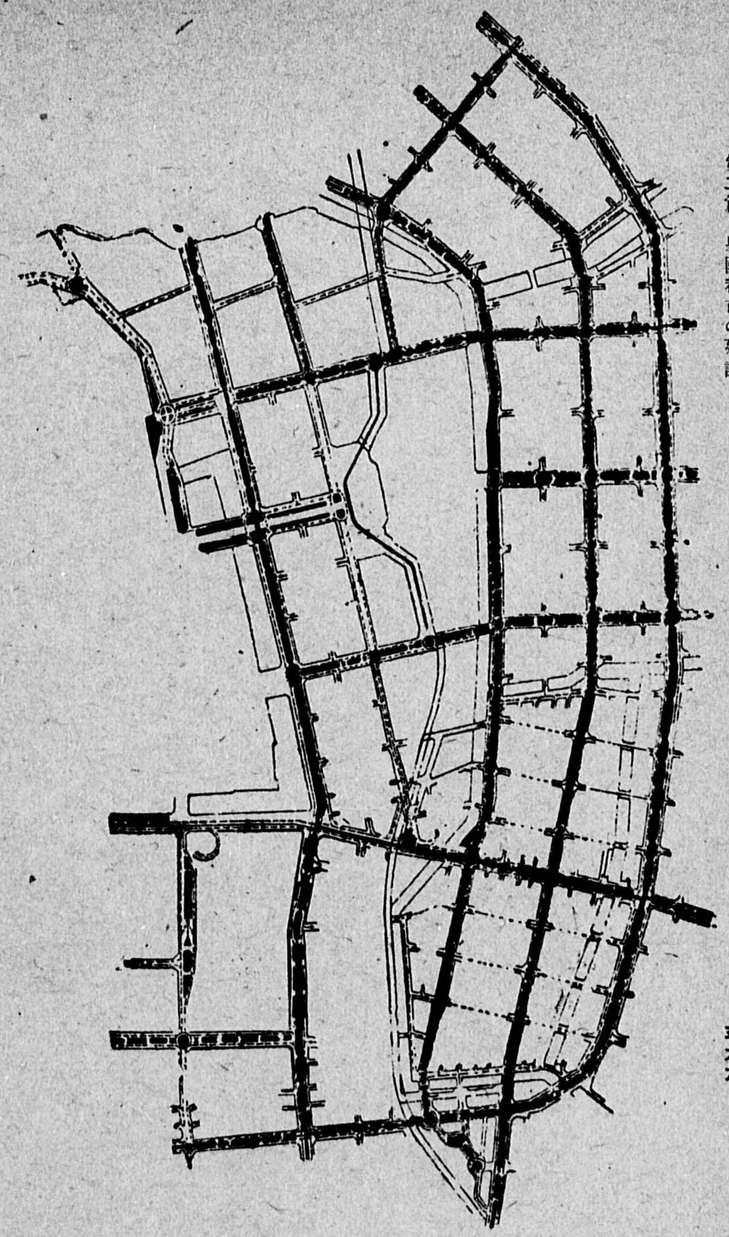
（ロ）微材事業の勵行

世界の情勢から見て、今後長年次に汎つて有資材事業を考へる事は出來ない。從つて我々は一應總ての土木計畫を、極少材料によつて最大效果をあげる樣配意しなければならない。

之れは特に市中の如き建築物多き場所に於て考へなければならない。例へば重線にそつての街路も出來る限り現存のものを利用し、極少工事により系列を建てる。尤それも重線が銀座等を貫通しる場合はむしろ商店中心を他の——例へば西銀座の如き線に移し銀座を交通專用とする事も考へられる。

又、上野、澁谷の如き今後育生を要する場所を通る場合は、重線の迂かいを計る等の配意により、極力能率をあげる樣配意しなければならない。

（ハ）次に交通整理計畫として提唱出來るのは混雜區域に對する定流或は交通整理法の適用である。此れは之れによつて交通の重點化を計らんとするのである。即ちローターリー式交通整理が全集中交通を均等に低速化するに對し、此の式では重要線には完全に速度を維持せしめ、二次線の速度を落さうと云ふのである。之れによつて帝都都心部の交通整理計畫を樹立して見たものが左圖である。



第一五七圖

るけうを用意のそが繰るてれき示表（太く黒書計理整逆交式流定の巻心中都帝

此の方式を上述重線に沿つて行ふのである。

（二）第四に交通調整であるが、之れに經營的なものと技術的なものとある。經營的なものは資本の單一化で、都内に關する限り之れは飛躍的な成功であつた。つゞいての問題は郊外部分との單一經營である。

之れは今日、夫々强力交通會社の資本によつて横に統制されつゝあるわけであるが、之れは決して最後的なものではない。急ぐのは、環狀統制よりは放射統制であり結局全面的な都營が覘でなければならない。

技術的調整としては重線的整理と、各交通機關の交點の問題がある。

重線的整理は主として市中の問題であるが、之れは不用線の運轉を廢止（或は定期廢止でいゝ）して重線交通に偏用せしめる。重線交通は又乘り換點以外通過と云ふ樣な急行强化の方策を採る。

次に交點問題は市中郊外の聯絡交通が最も重要で、之れを「通し運轉」する事が最大の理想なる事云ふ迄もない。

但し之れはゲージの差異なき時に限り適用し得るが、然らざる場合は結局共同驛舍制による聯系運轉の方法を採るより仕方がない。東京都市計畫では新宿廣場及び澁谷廣場の場合に此れを懲懲し、澁谷では成功した。

尤も之れは兩者共に有軌道機關の場合であるが、バスその他の機關との聯絡は必ずしも共同驛舍では出來兼るかも知れない。その場合にはバスステーションを設けるなり、廣場による圓滑なる乘り換へを工夫してやらなければならない。日本には未だ此のバスステーションの完全なものを見ないが、追つての問題としては考への中に入れて置かなければならない。

二、郊　外　部

郊外部の交通機關の任務は

市中への輸送
生産强化
通過交通を市中に送らぬ事
郊外の人口密度を高めぬ事
郊外整型の助成
等である。

之れ等に對し道路及び交通機關が任務を分け合ふわけである。尤も此の際は市内部の場合と異なり、多少自由な形を採る事になり、且、道路及び交通機關が必しも融合一體の形を採らない。よつてこゝでは方法別でなく事業別に考へる事にする。

（イ）道　路

市中向きの放射道路は東京では大體計畫が完備して居る。事業も可成り進渉してるから、之れについての努力は第二次になる。それよりも問題となるのはロ、ハの目的を兼ねて郊外環狀線を完備する事である。たゞ此の際之れ等の線が郊外人口密度を高める事に對しては十二分の警戒を要する。

よつて之れ等の線には、後退建築線の指定、その他の方策を加へ極力家屋連擔化を防がなければならない。その爲に八號環狀線を三十三米の幅員に擴げ、その目的にそはしめよと云ふ意見があるわけである。尤此の八號環狀は

立川—赤羽—蒲田

の三地帶を直結する目的をも兼ね有郊適切であるが、さればと云つて之れ等の大使命の爲には此の一本で足りる筈なく、併せて五十米位な幅のものが此の八號線の内外いずれかの側に近接計畫實施せらるべきであるともされて居る。

ロ、交通機關

郊外交通機關については二つの問題が考へられる。それは

精能化　郊外造型化

である。前者の爲には沿線横斷を出來るだけ除く爲に、沿線道路を設けるのも一策であり、二交通機關が交叉してる時は、その乘り換へ驛の共同化がさしづめ大きな解決である。特に之れは、その線が産業戰士線である時效力が大きい。又郊外造型としてはその人口密度增加を防ぐ爲に停留所數を制限し、出來可くば衞星都市直通車を增發する事が第一である。

次では主としてバスの問題であるが、此の郊外部の赤羽地域、蒲田地域の從屬地域乃至郊外ブロック間の相互聯絡の爲に、郊外バスの環狀聯絡的整理が考へられる。

（ハ）施設計畫

施設計畫として今日可能にして最も重要な問題は

港灣、河川、工業地帶の排水　水道

等であらう。

特にその中緊急の要あるは市中に於て水道事業、都下に於て工業都市の排水問題である。

尤も之れも極力微材計畫で行はなければならない事云ふ迄もないのであるが、市内水道に對しては現在防火水道として工業區域を半經五〇〇米内外に分割し、之れに地下水水源を與へ簡易資材で自給水道を設けてるの等勵行すべきで、之に山の手方面の自家用井作成促進事業乃至下水處分水の工業乃至厨房活用等と併せて遠距離導水の補正を爲すべきである。

又、都下工業都市排水は工場能率乃至勞働者保健の問題から云つて危期にあると云つてよいがさればと云つて資材もない事であるから、之については

簡易溝渠計畫

灌漑式汚水處理等

の採用が考へられる。前者は結局在來のドブ式の復活であり、後者は汚水が多摩川を汚損するのを防ぐ爲に上流にて灌漑に用ひんとするのである。

尤も此の爲には化學工業の廢水は用ひるわけに行かないから、それ丈は分流處理しなければならない事云ふ迄もない。若し之れが行はれゝば肥料問題の多少の解決にもなる。

二、規制區域部

之れは半圏五十粁圏であり東京の通勤圏にも當るので、此の圏については衞星都市育生と同時に、それの無限膨脹を抑止し、且その殘餘の區域の健全なる發達を導かなくてはならない。その爲には衞星都市については特定の工業を一定限度迄經營する事を許し（例へば大都市工場の支工場乃至食糧・印刷・建築工業等、大都市を對象とする日用品工業等により人口十萬程度迄育生せしめる）殘餘の地域に對しては極力蔬菜を中心とする農業經營に沒頭せしむべきである。

策としては電力、居住等の配給を農業向きに低額に、工業向きに高額にすると云ふ樣な事も考へられる。之れ等に關する交通機關については既に區域處理の所でのべた樣に

踏切りの消略

停留所の間隔の增大

と云つた樣な事がこゝでも考へられる。

三、地方計畫圏

（一）關東地方の價値

關東の條件は京濱工業地帶を百粁圏内に有する事である。その間平坦であり交通は既に相應の發達を見て居る。又關東地方の價値としては平野自體が「面積」「生産」「都市數」に於て濃尾、攝津の兩平野に沓に勝れて居ることである。

日本三大平野比較表（關東、攝津、名古屋）

關東平野

區別／府縣名	面積（方粁）	農産（千圓）	工産（百萬圓）	總人口（千人）	農村數	都市數 人口一萬以下	人口三萬以下	人口五萬以下	人口一〇萬以下	人口一五萬以下	人口二〇萬以下	人口二〇萬以上
東京	二、一四五	二九、〇七〇	三、一六七	七、三五五	四八	八	八	二	一	—	—	一
神奈川	二、三五三	四四、〇〇四	一、六七七	二、一八九	九五	二五	七	四	一	—	一	二
埼玉	三、八〇三	九三、三三二	三〇〇	一、六〇八	二九三	三八	八	三	一	—	—	—
千葉	五、〇六二	一一四、五五九	一三三	一、五八八	二三六	七〇	一二	—	四	—	—	—
群馬	六、三三六	六三、一一一	二〇二	一、二九九	一五四	三二	六	二	三	—	—	—
栃木	六、四三七	九〇、五四六	一六六	一、二〇七	一三四	二九	一三	一	一	—	—	—
茨城	六、〇九一	一一〇、七三八	一四二	一、六二〇	三一六	三八	一三	一	二	—	—	—
計	三二、二二七	五四五、三六〇	五、七八七	一六、八六六	一、二七六	二四〇	六七	一三	一三	—	一	三

濃尾平野

府縣名＼區別	面積	農産工産	總人口	農村數	都市數					
					人口一萬以下	人口三萬以下	人口五萬以下	人口一〇萬以下	人口二五萬以下	人口二〇萬以上
愛知	五、〇八一方粁	一一〇、二三〇千圓	一、四五九百萬圓	一四三	四三	三四	二	—	一	—
岐阜	一〇、四九五	五八、四三五	二三四	三六四	四八	五	一	一	—	一
計	一五、五七六	一六八、六六五	一、六九三	五〇七	九一	三九	三	一	一	一

攝津平野

府縣名＼區別	面積	農産工産	總人口	農村數	都市數					
					人口一萬以下	人口三萬以下	人口五萬以下	人口一〇萬以下	人口二五萬以下	人口二〇萬以上
大阪	一、八一四方粁	五六、〇一〇千圓	二、二三三百萬圓	四、七九三千人	一四九	一五	六	—	一	一
京都	四、六二一	四三、六六一	三八七	一、七三〇	一九二	一九	四	二	—	一
兵庫	八、三二三	一一八、九一九	一、七七〇	三、二二一	三一八	五六	一四	二	二	一
和歌山	四、七二三	四二、五三一	二〇一	八六五	一七九	二三	五	一	—	一
計	一九、四八一	二六一、一二一	四、五九一	一〇、六〇九	八三八	一一四	三八	一一	—	三

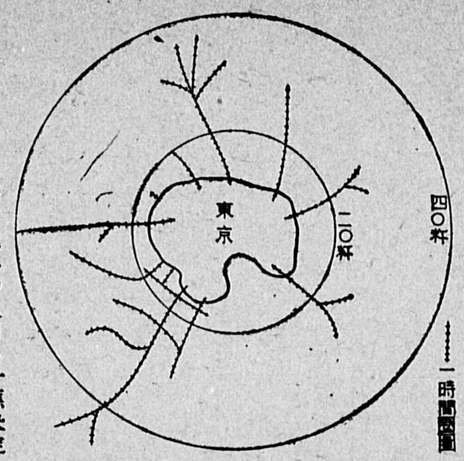
之れ等都市人口に富み農産多き事は國土計畫的に云つて申分なき地帶である事になる。唯それは東京あるが故に自由主義時代を苦しみ、又、東京あるが故に防空上その他の點より現在を見送らなければならない事になつたのである。併しながら今日と雖も大東京處理と云ふ消極的な意味に於ては使命なしとしない。即ちそれは大東京の工業乃至その他の施設の中他地方分離不可能なものの「引き請け」と「育生」である。

(二) 造型計畫

その趣旨に於て、計畫するとして先づ造型の點では地方計畫圏内に現在育生されつゝある工業基地は一應認めなければなるまい。今後の手法は

(イ) 如何にして之れを一定限度の都市に整理し

(ロ) 之れに協力工業圏と文教基地（國本都市）をそへるか



第一五八圖　東京都市計畫區域内時間帶

にある。

現在發達しつゝある地帶は、その單位工場が大なる爲に散漫なる開發をなさんとしつゝある。之れは必ずや大都市化の恐れあるものであるから、今にして之れを正しき形に誘導して置かなければ、將來必ずや臍を噛む悔あるものである。

之れは初めからその都市の正型を計畫し、之れに導くべきである。之れを環狀都市たらしめるか、他形式の都市たらしめるかはその場の狀勢によらう。何にしてもその場合綠地々帶の配分は最も要事である。都市を適正聚落に分割し、全體を又圍廓する、總て綠地地帶の作用である。

協力都市乃至國本的な文教都市の配置は、大體十五粁半徑に一つ撰定する必要があるが、之れの人口も一應決定して置かなくてはならぬ。出來可くば之れも内輪に見、十萬と想定して導く。

その他については大體此の平野の食糧及び人口供給上より見て、矢張り極力抑制するを可とし樣。

(三) 交通及び施設計畫

以上の造型計畫に次で交通及び施設計畫の任務は

先づ第一次に立地增强　地域相互の聯絡　京濱地帶との聯絡　東海道地帶との聯絡　東京迂廻

と云つた樣な事及び交通機關自體の爲の防空上の配意である。

立地增强については夫々の都市及びその工業地帶に對し

用排水路補給

電力補給

勞務者補給交通機關の配置

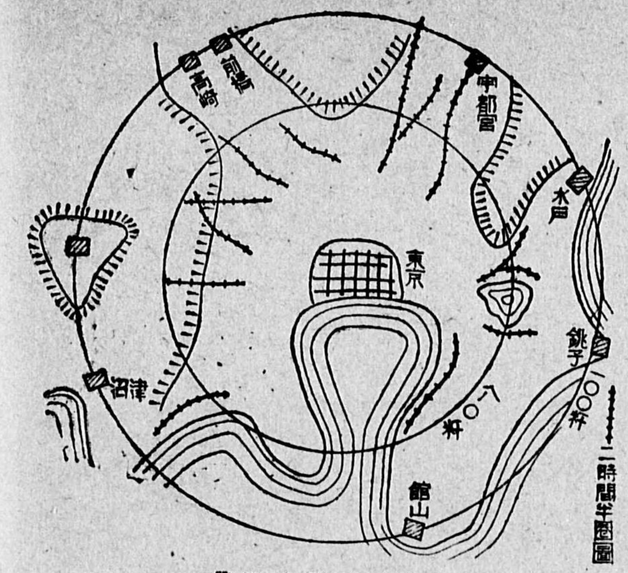
道路鐵道水路等の配線

特に出來れば港灣の補給である。

之れは內陸都市では自身直接と云ふわけにゆくまいから近接せる港灣との連絡路と云ふ事にならう。甲府に對する淸水港の如き適例である。その他については敢て解說の要もないであらう。（銚子港と利根沿岸の關係もある）

第二には相互聯絡である。

之れについては高崎、太田、宇都宮、水戶の一帶。太田、立川、相模原、橫須賀の一帶等强き聯絡線が必要である。此等に對し道路鐵道等併行して强化する必要がある。



第一五九圖　關東平野時間帶

又北關東一帶の地方と京濱、東海との聯絡も無論缺く事が出來ないが、たゞ此の際通過交通量が市中を貫通する樣な事はさけさせなければならない。その爲に迂廻線が必要になる。

而して、問題の重點は之れ等の線の計畫にあるのでなく、之れ等を何によつて具現するかにある。之れに對し完全計畫としては

高速度道路

鐵軌道

等がサービスする事になるのであるが、然し今日の問題としては高速度道路に代るものとして、

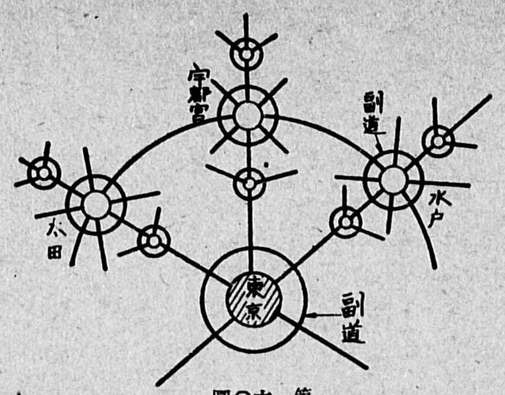
重要路系の指定

之れにそつて各都市迂廻路を設ける

鐵道については不用線の整理及び私鐵の省線化

等により指定系路の强化に努める事に止らふ。

以上一應の整備を終へたならば施設自からの防護の爲の配意が必要となる。それは指定路系について各機關が相補ひ合ふ事で、出來可くば一點集中をさける。



第一六〇圖

尤も鐵道については副系活用の爲には一應どこかで聯絡する必要はあるが、一度聯系を固めたならば、經過地點は生產要點以外に於ては相成るべく分離してる事が望ましい。

次に關東平野全體となつて初めて問題となる交通機關及飛行場がある。現在我々は陸羽街道に副つて飛行場の一つもなきを知るのであるが、防空上よりするも平時の爲にも此の線上に一つ二つの飛行場の存在は望ましきものである。東京に近く東京用のもの一、二(舍人、浦和等が考へられる)、平原中部に不時着陸上、北關東各工業基地に一つづ設けられる。之れは設定豫定地を保留して置く丈でも結構であると考へられる。

第三篇　民族と都市

第一章　民族論瞥見

大東亞共榮圏構成上の重要技術は、何としても民族相互の調和ある結成である。民族相互をして夫々の秩序を保ちつゝ更に大東亞全體と云ふ大秩序に服せしめる。此の技術こそ最後のものでなければならない。

而ふしてその爲に重要なる方法論は、先ず一つの民族が民族として一應の固き結合を有つ事。尤、それは鄕土が「私」の解放段階たり得た樣に、民族が民族に終る爲のものでなく、それは更に共榮圏への融合態勢を採る可き礎石的結合でなければならない。

次で重要なる方法論はその民族全體の中からその「指導者としての一民族」を撰ばなければならないと云ふ事である。指導民族の存在なくして、民族群の大同團結が遂げられる筈がない。

かくして、こゝに民族結成の技術が必要となる。此の爲には一應民族觀を得て置かなければならない。幾多の民族論の中、關西大學小松教授の説が最も技術的なので、その要旨を抄出する。

×

先づ氏は民族の問題は、民族の結合の事實を捉へなければならないとする。結合と云ふ所に民族問題の重點がありとする。

第一章　民族論瞥見

その結合が如何なる經路を通して行はれるか。その基盤として、氏は民族の偏向と云ふ現象を捉へる。即ち氏は此の偏向を

「民族的偏向は云はば民族的本能と呼ばれるかも知れぬものであつて、意識に潜在する本能類似の傾向又は素質」なりとする。

然らば此の民族的偏向は如何にして生じたか。之れは原始に於ける性本能に起因する種族闘争から來てるとする。

「人類が血緣の意識を取得して以來、血の異質を原由とする闘争が始まり、又風俗、慣習、生活樣式の差異及び言語の差異は血の異質を象徴するものとして闘争の原由となつた。此の血の異質の故に爲きるゝ闘争が即ち原始種族闘争なのである。」

「かゝる種族闘争の反復から遂に種族的偏向が人間の意識の奥に剥みつけられた。異種族を憎み、同血者を庇ふ心意がそれである。嚴格に云へば或ひは遺傳的に同血の流れを酌むものであるかも知れぬ場合でも、言語や風俗を異にするが爲に血を異にすと信ぜられてゐる、種族を憎惡する傾向であり、或ひは言語や風習の同質の故に血緣の同質を信ぜらる人々へ好意をよせる傾向、即ち所謂緣者贔負の傾向である。」

「自生的文化が芽生へ、感情の共同が漠然ながら看取せらるゝ樣になれば、感情共同社會としての民族は既に成表し初めたのである。かゝる自生的民族は種族の自發自展せる成果である當然の歸結として、種族的偏向を承繼するから、それは民族的偏向としてそれを受け取るのである。民族的偏向、自他兩民族の對立に際し殆ど列外なく自民族の心意及び行動を肯定し、他民族のそれを否定する傾向に外ならず、從つて非常事件が突發してかの偏向を刺戟するや、自民族の正義を主張し他民族の不正を難ずる感情が奔流するのである。」

かゝる民族偏向が兎も角こゝに發生するとして、此の傾向を強調するものとして氏はこゝに他の主觀的因子があるとなす。それは「民族的優越」でありとする。

「種族及び民族の關する限り、血の優秀を誇示する傾向、血緣的集團間の優秀を爭ふ傾向となるは必至であり、こゝに民族的優越意慾の發動が見らるゝのである。尙これに傳統や文化の優越の信念が結局、それを生産する血の優秀の信念となりて、民族的優越意慾をいやが上にも强化するのである。」

かく優越感により强調された偏向は、更に言語、風俗、慣習傳統化されたる文化等を同じふする所に生ずる共同社會感情によつて重ねて强調をうけ、そこへ外部刺戟が加はつて民族偏向は民族感情を放出する。その刺戟は或時は反對民族の方面から或時は民族内部の反民族的勢力から與へられるとする。

「かゝる刺戟が民族的偏向及び民族的優越傾向に衝擊を與ふる時は、今迄沈潛狀態におかれて居た民族感情素質は俄然燃へたつて表面に躍り出でゝ興奮の狀態を呈する。之れが即ち民族感情である。」

さてかくして『民族偏向→民族感情』の過程をへた民族感情はいかにして民族結合力を發揚し得るか。之れに對しては以上の大體に於て主觀的な條件に對し、客觀的な條件の成立が必要であるとする。然らざるに於ては民族感情は浮動性の故に結合力と迄は發展し得ないと云ふのである。

然らばその客觀條件は何であるか。氏は之れを分けて、

「自然的條件（大體に於て基礎的條件）
「文化的條件（大體に於て派生的條件）

とし、自然的條件としては

「血緣
「地緣

をあげてる。その中血緣に關しては「少くとも血緣の近似又は類緣は絶對に不可缺なる條件と信じる。もし異種の血液が混在するときでも、それが混合して第三血液を生ずれば、これを基礎として民族が成立しうるのであるから、血液の混和といふ歴史的事實は何等民族成立に障碍となるものでない」とのべて居る。

それに對し地緣は「血緣の重要性に對し、地緣は民族結合にとりて寧ろ第二義的である。換言すれば地緣は血緣その他文化的諸條件の成立を容易にし、或ひは可能にする意味に於てのみ民族にとりて意義があるのであつて、地緣そのものが民族結合の本質的構成要素をなすものでない」として居る。

兎まれ血緣地緣の重要性をあげて、風土については之れは間接的であつて、先ず「氣候、溫度、土質、地勢及自然的生産物の差異によりて人間の身體及び氣質に異質性を生じ、更に之れを通して民族的偏向に影響を及ぼす」か「衣食住の如き日常文化を通して、民族結合に貢獻する場合と他は文學の如き高級文化を通して民族結合に貢獻する場合」とする。

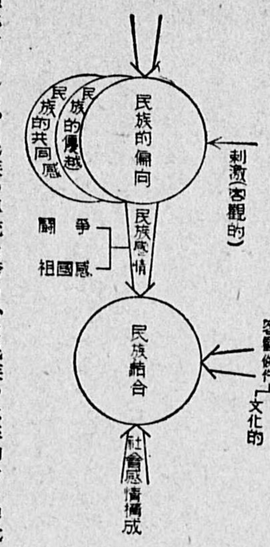
以上自然的條件に對し文化的條件がある。文化的條件とは言語、哲學、科學、藝術、宗教の如き高級文化、經濟、政治もしくは國家、或ひは風俗、慣習及び生活樣式の如き日常文化である。勿論之等のものが同時に作用する必要はない。その中の二三が働けば足るのである。

さてかくして民族結合作用は了する譯であるが、この際あく迄重要な役割りを爲すものは民族感情そのものである。之れなくして如何なる結合も形式に逸する。然らばその場合の此の民族感情の内容は如何なるものであるか。

氏は之れを端的に「民族的偏向に對する刺戟の加壓によりて發動するものは民族成員間の親和の感情であるよりは、より多

く他民族に對する敵對感情であり鬪爭意慾である」とする。

その理由としては「(一)民族的偏向は種族鬪爭より派生せる種族的偏向の發展形態であるから、その民族血負の傾向には必然に鬪爭的傾向が織り込まれる。烈々たる鬪爭的意慾及び感情が自から、敵對民族を斥けて自民族を擁護せんとの傾向に轉化したのである。(二)民族的偏向は民族の血の優越の信念により



第一六一圖
(著者解圖)

て强化せられる。民族の傳統を誇る心は民族の生來的なる勇武の精神、優秀なる文化を生む血の優秀への信念等を含むが、これらの心情は畢竟血の優越を誇示する情意であり、又、民族の優越を索むる意慾である。」と云ふ樣な說を爲してる。

尤も民族感情は鬪爭意識の如き原始的なものにのみ低迷するとは限らない。そこに氏は「土地」との關係を說く。

氏は先ず我々が土地に對しては、利益意志の對象としての感情を有つが、それはやがて「永く土地に定住する間に自から血緣關係が形成せられ、或は血緣ありとの信念が生じ、從つて共同祖先への思慕が成立する等の事によりて共同社會的感情が發芽よ出る」のであるとする。

「要するに人間の感情は鄉土に關はらしめられる事にとりて自生的民族感情となるのである。」

然らば祖國感情を內容とする民族感情と、土地との關係は如何。

此の場合祖國感情は、鄉土感情の如く直接的でない。そこには先ず種々なる傳統を仲媒として、領土愛護の感情が發生し、之れは當然その上に國家あるを前提とする所から、祖國愛に迄高まる。

そして「國家の元首が民族發祥の根源であり、共同祖先である場合は、傳統愛護の民族感情は又共同祖先たる國家元首への忠誠の感情として現はれる」と高調してる。

以上で大體民族現象の構成の概要を成す譯であるが、最後に氏は民族的偏向が何等か突發的なる大刺戟をうける時、民族感情を派生すると云ふ命題の中に一問題をとらへて居る。それはその刺戟をうける時の社會の感情構成である。

それに對しては「一民族內の特殊階級のみの民族自己僭稱がなく、たゞ民族の中に能動的成員と、受動的成員との別のみが見らるゝ如き民族。民族感情が階級的利益によりて遮斷せられず、民族感情が特殊階級の獨占の對象たらしめられぬ民族に於ては、民族感情は民族成員の總體によりて體驗せられる事となる」とのべて居る。

而ふしてかゝる完全調和狀態たり得る爲には「惟ふにそれは相互に他の意志と調和し得る程度に自からの意志を否定するところに成立する」として居る。

×

以上極めて大要であるが、之れによつて民族問題の何たるは一應技術的必要の程度には理解がゆくのである。

かくして氏は巷間しばしば此の問題が、單なる政治上の技巧であるが如く唱ふるものに對しては、徹底的に「本念的なる動き」なる所以を强調して居る。卽ち氏は「民族の本質の研究に當りて、各觀察者の政治的立場が民族理念の把握を根抵的に制約すると云ふ見解、或ひは民族理念そのものは民族自體（もしくはその指導者）の把持するイデオロギイにより制約を被ると云ふ見解を、我等は徹底的に誤謬に充てるものとして認識する。個人主義的自由主義的民族觀に對して、有機的民族觀がその政治的觀點より單なるイデオロギイとして定立したる民族理念なるものが、果して民族の本質を端的に捉へて居るか否かは、その政治的觀點より吟味せらるべきでなくして、寧ろ、事實を事實として把握しようとする科學的立場より檢討せらるべきである。換言すれば、民族の本質は當該民族指導者の抱懷する政治的イデオロギイにより歪曲せられ畢るものではなく、そのイデオロギイの如何に關はらず、民族と云ふ社會的存在の中核的事實に直入してそれを捉へ來るところに初めてその全貌を露呈するものである」と强く主張して居る。

此の見解によればナチス獨逸が此の民族問題をとらへて主導政策とした事はヒットラア總統の秀拔なる叡智が、此の潛

在せる力を見出し、正しく指導した事になるのである。此れ或は正しく然るべしと諒解せられる。

從つて近代民族運動史はナチスに初るとするも、民族問題そのものは有史以來内潛して居たと云ふ事になる。何にしても今後しばらく世間が世界戰爭の渦中の文化にあるとするならば、此の民族問題はそれからそれへと複雜化し、高度の政治の指導理念となつて、我々の智能をほしいまゝに驅使するであらう。

×

尙、氏が民族理念として對立せる獨逸的理念とフランス的理念について一言してる部分には、示唆深いものがあるから斷章的に拔抄して見る。

「ドイツ的民理念は强いて意志的要素を重視せずに、より多く民族精神の超個人及び越合理的歷史力の有機的生成發展の成果として把握せらるるといふ事を。要するに民族の形成は民族諸成員の合理的意志又は目的意志によりてなされずに、寧ろ民族精神が言語や慣習及び信仰等に具現しつゝ默々と作用することによりてなされるのである。」

「フォルク（獨逸の主張する民族感念）が血緣や地緣の如き自然的要素と共に言語、慣習、信仰、民藝、民謠、民象文學の如き自生的諸文化の凡ゆる契機を媒介として生成したる社會圈であるとするならば、之れを基礎として此の上に國家が組織を作り統一化を行ふならば、やがてフォルクは國家の政治的工作の結果として母國語を共同に持ち、統一せる國民精神を受容し、政治に將又軍事に統一的行動をとり、投票に或ひは議決に共同の態度を持し、國難に當りて統一活動を營むことによりて、こゝに初めてナチョンに迄發展するのである。このナチョンへの發展は、しかし必ずしもフォルクの發展的解消を意味する必要はない。ナチョンの形成後と雖も、フォルクは依然自生的社會圈として背後に殘存しうる。」

「言語、慣習、信仰、文學、娛樂、民謠、民藝品等の如き自生的諸文化への愛着と、その存續の意慾を媒介とする民象相互の感情的合致と親和こそ自生的民族たるフォルクの結成を推進し來る契機であるが、之れが背景となる事なくして、意志的團結を支柱とするナチョンは恐らく形成に困難を伴ふ事が多いであらう。」

「民族は感情共同社會より意志共同社會に發展する事によりて最高潮に達するが、これは云はゞフォルク（獨逸的）よりナチョン（佛蘭西的）への發展とその軌を一にする。」

×

小松教授の說はかくして、皇國都市の構想に關する限り民族感乃至民族としての組織を獲得する爲には、單に自然湧發を俟つ形や機械的な政治的な手段によるのみに滿足せず、自然的、文化的なる客觀條件により民族結合を固める必要ありとする。之れは結局に於て文化を中核とする鄕土建設になる。

思ふに共榮圈指導民族として我國の手法は、先づ第一に出來る限り多量の人口を共榮圈全面に配布しなければならない事である。その場合重要な事は如何にして太和民族をして、現地に於て永久に醇乎たる太和民族精神を保持せしめ得るかと云ふ事である。云ひかへるなら、いかにして現地に於て「鄕土」を育生する事が出來るかと云ふ事になる。

之れに對しては醫學博士古屋芳雄氏等（國土、人口、血液。古屋芳雄著）も極力血液の純潔を維持し、且所謂二世化現象に落入る事を防止すると共に、その第一世に於ても常に母國への精神的紐帶を失はざる樣配意しなければならぬものである事を警告して居る。

此の爲にも、それは例へ第二義的であらふとも血緣その他の民族結合上の條件を容易ならしめるものとして地緣結成が重要となつて來る。その都市計畫的手法としては現地日本村の建設の手法となる。

次ではその援護地であり、且大同團結の思想紐帶であり、二世化防止の練成中心としての文教基地の建設が忘れられて

はならぬ事になるのである。

尤も此の際特に留意を要するのは指導意志の力餘り、總ての被指導民族をして總ての環境を無視し日本本國の生活形式に鑄縮せしめんとする考へ方である。少くも民族の生活形式が、單に風土のみの面よりしても、いかに強大に條件づけられつゝあるかは、和辻哲郎氏の風土、の解説によつても理解し得られる。

氏は世界の風土を大體

モンスーン型
沙漠型
牧場型

として居る。

而ふしてモンスーン型の風土の產む民族性としては、その猛烈なる定期的災害は、日本等ではその災害が寸時にして且特惠的な結果となるとこかも、反撥、忍從、諦認と云ふ樣な性格と共に朗明な天を樂しむ性格をうみ、家族的な協力を習慣づけて居るとする。

然るに、同じモンスーン地帶でも支那等に於ては、その災害の影響が長い所から自から忍從と虛無性を伴ふ。尤こゝでも家族的な協力は當然習慣とならざるを得ず、災害の規模及相互扶助の必要は鄉土的結合を迄强からしめてる。

沙漠型の地帶に於ては何等天與の惠點なく、又その聚落は緣に缺くを以つて、總て人間的になる。又外敵に對する必要は國家精神を强固ならしめて居る。

宗教は自から絕望的な所から、唯一神を信ずる樣なものになる。

牧場型は現ヨーロッパであるが、こゝに於ては總て特惠的な條件になつて居り、天災も少ない所から自由主義、利己主義におち入り易い。云々。

之れ等がいかに歷史地理の形式を通し、都市の形態に變化を與へて居るかは驚く許りである。此れを無視して何の建設も効ある筈がない。よつて以下世界の都市形態について一應の一瞥を與へ度い。卽先づ此の部に於ては世界に於ける都市形態が、如何に歷史的地理的に變化づけられたかを觀、つゞいて我が都市計畫陣營が大陸に於て、その努力を傾けつゝある大陸都市計畫を紹介し、最後に著者が關支したる大陸都市計畫の一例として上海都市計について概說する事にした。總て皇國都市の大陸型の發見試論と考へ度いのである。

第二章　世界都市の史的概觀

世界の民族がその發展過程に於て、自からが最適する都市を創り、それによつて彼等の「今日と明日」を建設した狀態は都市計畫史に於て明かである。

唯此の場合に於て我々は一つの民族の長き發展史を跡づける丈の資料を有たないので、之れを大まかにその都市定型の明快であつた歐洲都市について類推するより仕方がない。

先づ我々は歐洲都市計畫史を大體に於て

古　代
希、羅、時代
中世、近世
現　代

に分ける。

第一節　古　代

我々は希臘、羅馬以前に古代都市の一聯を有つてる。

先づエヂプトにはメンフィス（カイロの南方約十二哩。紀元前二五〇〇年頃のエジプトの首府）、テーベ（イリアッドに

於てその百の門を賞揚されて居る)。アッシリアのニネーベ(紀元前六〇六年に滅亡)、バビロン(城壁十四哩と稱せられる。紀元前五三八年破滅)。フェニキアのチル及びシドン(世界最初の商業都市)。その他カルタゴ、イェルサイム等が知られて居る。

之れ等の都市と次の世代と都市との差異は之等の都市が

商　業　都　市(主として海港)

攻　略　中　樞

寛頭政治中心

極端なる奴隷制度

等であつた事で、それ等の特徴として殘されてるものは總て、超人の作業に近き紀念建造物である。

例へばエジプトのピラミッドは云ふ迄もなくパルミラの柱列凱旋道路の如き、之れ等を通して想像し得る當時の都市形態は、黒谷了太郎氏の云ふ如く、(都市計畫及び農村計畫の著者)

壯大なる外觀(城壁、寺院等)

華麗なる權力者の生活環境

汚ない隘少なる奴隷家屋

を以つて構成されたりと想像される。

特に次の世代に對する相異の著しきものとしては

貴族の發生未前

市場の發達未熟

なりし爲、廣場生活が著しくなかつたであらふ事である。

第二節　希臘、羅馬時代

之れは古代後期とも云ふべくその經濟組織が奴隷制度に基礎を置く點では前代同樣である。唯此の頃から氏族的英雄時代が漸やく自治制都市國家に移行し、現代都市の萠芽となつた。卽ちギリシヤには評議會、民會等のものがあり、貴族も氏族的なもの以外の要素を入れ、その新しく加はるものゝ力が漸增する傾勢にあつた。

此の間の消息に關してはマンローの都市行政及び經營論の中に「王は貴族より成る樞密院を有つて居たが、それは漸次その職能を擴張し、遂には王よりその國政に關する大權を奪ふに至つた。かくて貴族政治が久しく續いたが、結局强力なる寛頭政治に變轉し、凡ての政權は少數の特權貴族に掌握された。次で商匠階級の擡頭、政治的特權と多數人民に擴張せしこと、下層人民が漸次向上して政治を支配し得るに至る等の事件が次々に起つた」と記してる事にうかゞひ知る事が出來る。

又機能としては商業が殷盛を極め、金融業の威力頗る行はるゝ迄に達した。かくして構成されたる都市は

城　壁

アクロポリス(丘陵上の神殿區域)

廣　場

等を特徴とした。

特に此の「廣場」の存在は最も特徴的で、之れは次の世代「中世」へ迄の範となつた。即ち之れは一方協議政事の屋外議事堂であると共に又市場でもあつた。之れによつて市民は結合し、協議し日常生活を送つたのである。

希臘にては此を Agora 羅馬にては Forum と稱したが、いずれも同じ機能であつた。道路の構成は之れを中心とし、夫々の城門に直結された。

第三節　中　世

中世都市の經濟史的な説明は奴隷經濟より農奴に依存する封建制度への移行である。即ち都市後背地に於ては農村地域が展開し、之れを保護する爲の領主が存在してる。此の領主は又その軍權により併せて、都市をも保護する。

都市内部は前代と異なり

商業は内地交易となり（從つて市場的價値高まる）

手工業が發生し

政治組織は完全に自治となる

政治組織についてはその最高度にあつた獨逸都市の狀態について、マンローが同じく次の樣に語つて居る。

「中世期に於ける獨逸都市の政治的組織は同時代に設けられた伊太利の都市と大差なかつた。即ち市には公選による一名の市長（時には三、四名あつた）と上院とよりなる大なる市會があつた。併し北部では南部と等しく、人民にあると考へられて居た權力が、一部の商人貴族の掌中に集められて居たのである。商人がギルド即ち商業組合を組織した事は此の商人閥の支配を一層有力ならしめた。工業の發達と共に工匠も亦ギルドを組織した。時々工匠ギルドは商人ギルドに代つて市の支配に當ることがあつた。が、多くは此の二種のギルドが共同して市の支配權を行使したのである。上院も市會も彼等の意の儘に動いた。ギルドは支配階級を形成し凡ての吏員はその内から撰ばれた。

市の主なる利害關係は商工業にあつて完全なる市民權は漸次商業團體若しくは工業團體の全員たるものに限定せられる事になつた。」

又領主が十字軍等の爲多額の費用を要し、それを夫々の都市に賦課せしめるより仕方がなかつた等の結果は、その交換條件として自主權を得る事となり、それは益々强められて行つた（一方領主自體は小規模なものは强大なる領主に併合せられ國家形態へと發展的解消をとげつゝある）。

かくの如き狀態下に於て、中世都市は一つの定型を確立した。それは

城　壁

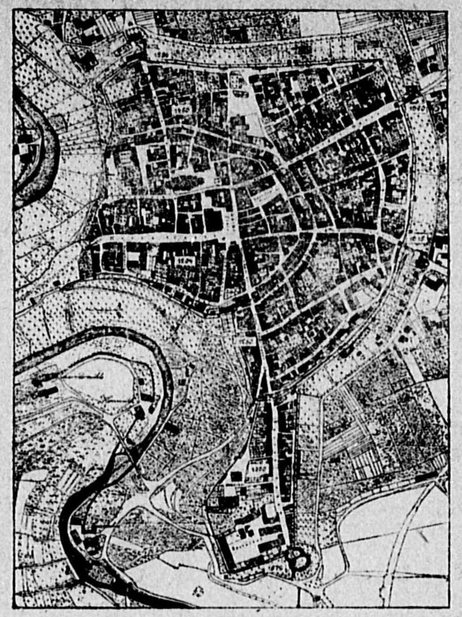
廣　場（時に二つあり）

市場廣場（市役所等あり）

敎會廣場（敎會あり）

迂曲せる道路（廣狹常なくその廣き部分は市場にあてられてる

等により構成されてる。（第一六二圖）



第一六二圖

然ふしてその廣場生活は市民によつて釀成されたものである爲に頗る賑はしく、一種の盛り場的景觀を呈した。

第四節　近　世

都市計畫史的には中世と現代との間にルネッサンスが入る。即ち一五〇〇年頃以降であるが、此の頃より都市構成の重要々素であつた商業は、都市の勢力圏の擴大と共に强化し、遂にアメリカ乃至印度オーストラリア等に對する大陸經營となり、やがては近代資本主義の原流たる工業資本に迄發達した。

然るに一方都市を單位として居た領主權は完全に解消せられ、都市の防衛施設たる城壁は無用に歸し、國家は大いなる國境と防衛權を以つて之れ等の上に君臨した。

それもやがて三〇年戰爭（一六一八―一六四八）となり終熄するに及びこゝに俄然平和事業としての處園技術による都市修飾が始まつた。それはベルサイユ宮苑（一六六二―一六八八）により完全なる粉本を獲それが

綠化せる廣場（噴象、彫刻、紀念碑等あり）

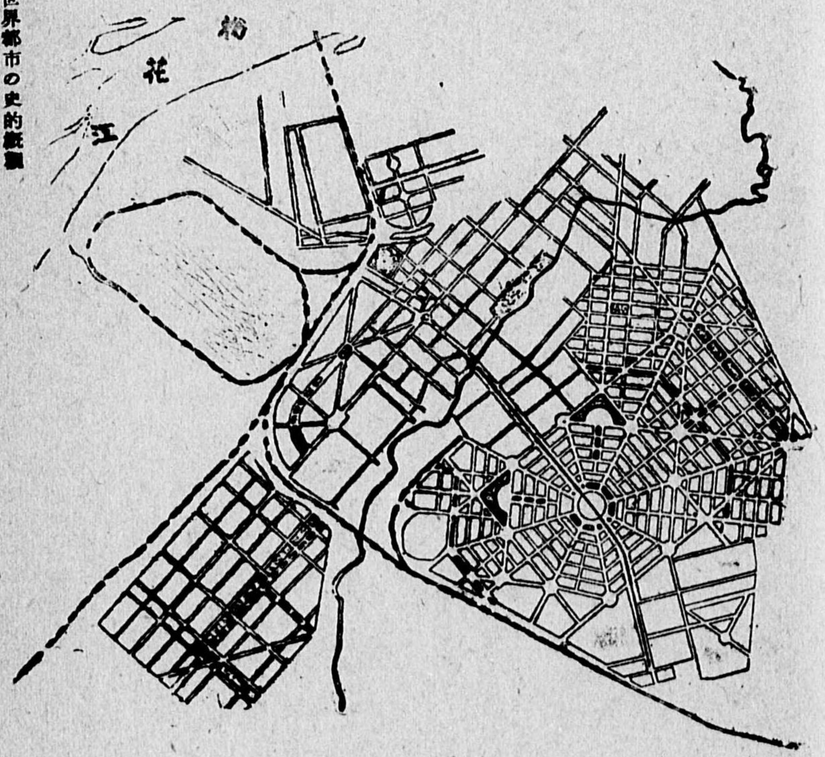
街樹ある廣路（放射系、環狀系）

綠化されたる水邊

公　園

等の形式で都市に適用された。

而ふしてその最も美しき例が佛蘭西のピーシー・ランファン大尉のワシントンの計畫（一七九一年）となつて實現し、パリー改造計畫（一八五六―一八七〇）を誘導した。



露西亞の計畫せるハルビンルネッサンスの技法
但し右半放射圖型は實現せず
第一六三圖

然らば此の時代に於ける市民生活はどをなつたか。此は少くも中世時代迄の如く廣場生活が唯一至上のものでなくなつたであらふ事は想像出來る。此の頃珈琲がトルコからマルセーユ（一六四四年）巴里を經て（一六六九）ロンドン（一六五二年）に入り、こゝにカフェハウス全盛の時期を得た。

此れによつて室内的有閑生活が高度に溫醸せられた事を推し得るのである。

第五節　現代

かくして我々は現代に入るのであるが、之れは一七〇〇年代頃より發展せる産業革命、一八〇〇年代より追發せる交通革命等により

工業都市の無限膨脹
市中街路廣場の交通占據
勞働住宅の過密汚損化

等々の形によつて、さしもの都市環境を悽慘なるものと化し終つた。その結果市民の保健の狀態は劣惡となり、市民精神は冷却し、結局に於て工業自體の能率を低化させるに致り、保健救護を主題とする現代都市計畫が勃頭せざるを得なくなつたわけである。

第六節　結

以上を通じ我々は大體ラテン系諸國の都市及びその計畫の史的發展を見たわけであるが、恐らくチュートン系に於ても大同小異と推せられる。

之れ等の中より抽象し得らるゝ結論は、結局に於て都市が、その時代の社會構成に順應し、定型を保有してゆく事である。

尤もそれ等は必ずしも一つの都市に於て變轉しゆくものとは限らない。概ねそれは新設都市に於て瞭亂と喚き誇るのであるが、又それは必ずしも新設都市のみに於てと云ふ事なく強大なる權力が成立する場合は、主として首府乃至大都市改造の形式でも出現し得る。

又以上の諸現象の中より我々は數多くの史的精華を遺産として殘される。例へば我々はそこに

廣場を中心とする隣保交權の生活
造園技法による都市の美的環境の構成
市民居住の保健的改裝

等々である。

之れ等はいずれも或は民族の種類をそこへて、世界全體に於て受けつがるべき定型であると考へられる。

第三章　世界の都市の地理的表現

第一節　世界全般

都市に表出された民族の生活偏向は、それが歴史的に地理的に働くことと、又都市の本質上現實の都市は必ずしも直にその時代の生活表出であり得るときまらないと云ふ樣な事から、必ずしも明快ではない。唯そこに多少のズレはあらふとも、何にしてもそれがその民族の諸表出の聚合體である事に誤りはない。

よつて之れを單純に地理的に觀察しても正確な結果を得られるとは限らないが、然しとも角それが何かであり得る事確かである。

しかもそれが明に大量觀察によつて或る地理的分布を有つ事が分明せられた時、我々はそこに何等かの形式の結論を得る事が出來るのである。

先づ都市の形式の大きな流れとしては次の樣なものがある。

- 迷路型
- 袋路型
- 通路型
- 網狀型
- 放射型

自然態

- 縱橫型
- 無限制
- 企劃制
- 自由制

計畫態

- 有心制
  - 多心制
    - 都市美制
    - 社會經濟制
  - 單心制
- 無心制

(一)　迷路型

迷路型の街路構と云ふのは都市全體に明確なる構造なく、街路は迷路を爲し迷路相互間に殆ど何等の聯系なきものである。之れに完全に袋路的なものと結局に於ていずこかに通ずる通路型のものと二つあり得る。迷路の分布は大體に於て赤道を中心とする地帶である。

而ふして最もその典型的に袋路的な形式のものを保有して居るのが、アフリカ北岸、アラビア、小亞細亞等の回教諸都市である。通路性のものは印度、支那、朝鮮等に入り（大邸は殆ど袋路制）歐羅巴では西班牙に此の形式多く、トレドの如きは完全に袋路性の都市でさへある。

之れ等が何故にかゝる地理的分布を有つかは全く不明である。人種の點より見るも必ずしも同一地帶とは云ひ難く、氣象より見るも亦然りである。

たゞ強いて、そこに胚胎を求むればそれが何となく

熱帶的なる事
回教的なる事
アラビア民族的なる事

等の事が云へるかも知れない。

或は又それが和辻哲郎氏の「風土」による、「沙漠地帶的現象」となるのかも知れない。

又文化史的に見れば

統裁力少なく
民度低き地帶

であると云ふ事も云へるかも知れない。とまれそれが又、何故にかゝる形成の根基を爲すかについては判定し難い。

(二) 網狀型

之れは一見殆ど全市に汎り系統なき如く見へて、實際上には實用に差し支へなき程度の系統を爲せるものであり、英國諸都市が典型的な例を爲して居る。

(三) 放射型

之れは中心に廣場なり公共建築が集中し、總ての街路之れに放射形に集中せる形式のものである。之の形の好く發展せるものは自から環狀系の街路網を形成せしめる。之れに中心の明快なものと不明瞭なもの及多中心的なもの、單一中心的のもの、都市美構成的のもの、地域構成的のものと殊別があり得る。

此の分布は全體としてヨーロッパ系と云ふべく、北緯五〇度以北的と稱しても差し支へがない。その主體は單一中心制にして社會經濟制であり、佛、獨、北伊、ロシア、その他北歐各國殆ど此の形式である。

多心性のものは巴里、ワシントンの如きルネッサンスの都市美都市、單心性にして都市美的なものもルネッサンス都市の一、二にある丈である。又多心制にして經濟制的なものは濠洲の主都カムベラが存在してるのみである。

從つて有心的なものとしては大體

單一中心制
社會經濟制

的なものであると云ふ事が云へる。

放射型の中・無心制のものは、西班牙及び伊太利が之れを占めて居る。こゝに於ては總ての街路は崩れんとして崩れず、しかもいずこかに都市の中心を求めて、集中せんとする形を示して居る。

之れ等の都市が何故に放射型を採れるか。之れは少くも單一中心經濟制の都市については

强力なる市民中心の成立
協議體の組織
經濟力の發達

等が推定出來るが、スペイン、イタリー等の都市の中心明快ならざるものが何を意味するかについては俄に斷定し難いのもがある。

(四) 縱橫型

縱橫型は計畫都市の起源である。之れに碁盤型と格子型の區別はあるが、大體に於て之れを上記の如く、無限制、企劃

制、自由制と分つ事が出來るであらう。之れの分布は地帶的には支那、日本、アメリカに最も多く、歴史的にはギリシヤ、の諸都市は勿論之れであつた。その中無限制とも云ふべきは、縱横の方向に一定の企畫なく、又擴がりに於ても無際限なるもので、完全にアメリカの獨占となつて居る。

企劃性のものは古代希臘、ローマ、北支那、南滿等の都市である。方形都市の中心は主街が交叉し、交叉點に廣場があり。周圍は概ね城廓がめぐらされて居る。

自由制と云ふのは無際限なるアメリカ系でなく、又窮屈なる企劃性のものでもなく、適度に展開せる縱横型で、我國の城下町は殆どそれである。

之れ等の諸都市の縱横制については、夫々は必ずしも一範疇に屬するとは思へない。

古代都市は恐らく技術の發達段階が然らしめたものであらう、支那の都市に於てはその文化思想が影響した所あるべく又日本の都市はその時代と建築材料が規定した樣に思へる。又アメリカに致つては紐育市會が議定せる理由の如く土地の利用と無限の發達を企圖するのみにあつた。

參考

此の中最も興味あるは歐羅巴都市――特に伊太利、西班牙に於ける迷路型と此れに準ずべき放射型、無中心制のもの等の配置であるが、その形の最も明快なものをあぐれば次の樣になる。

伊太利

放射型有心制

ミラン　ベロナ　パドバ　パーマ　ボロニア　ピサ

同上無心制

ベニス　ゼノア　ペルジア　ローマ　ナポリ

縱横型

チュリン　フロレンス

之れを要するに北部は大體中歐系に屬し、南する程無心制となり、迷路に近ずく形を示して居る。

西班牙

迷路型袋路制

トレド　セビラ　タンヂェール　コルドバ

同上通路制

バルセロナ　バレンシア　グラナダ　マルガ　バダヂョッツ　ブルゴス　バラドリッド　ラコルナ

ヲビード　ツァラゴヅァ　マドリッド　パロマ　マラガ　セゴビア　リスボン　オポルト

ここに於ては殆ど迷路が主調である。

此の兩國都市形式より推して推察出來るのは大體に於て、放射型無心制が迷路地帶の橋梁なる事及び北方程有心制で南方程迷路型袋路制なる事である。因に佛蘭西に入れば我々は直ちに中歐的なものに相遇する。

第二節　大東亞都市

一、露　西　亞

ロシアの都市形の主要形式はあく迄北歐系で、單一中心なる放射型である。

たゞ完全に北歐系と云ひ難きは、その中心部の核にはレニングラード、モスコウ等の如き王宮を置くものがあると云ふ事である。

此の形式の典型的のものは

モスコウ　　レニングラード

ニジニノブゴロド　　リガ

ヤロスロール

等である。

次で多きは縱横型で之れは自由制と云ふべき程度のものである。恐らくは殖民的な都市なる故であらう。

ヲ　ー　ボ（芬　蘭）

トムスク（シベリア）

ヲデッサ（ウクライナ）

イルクーツク（シベリア）

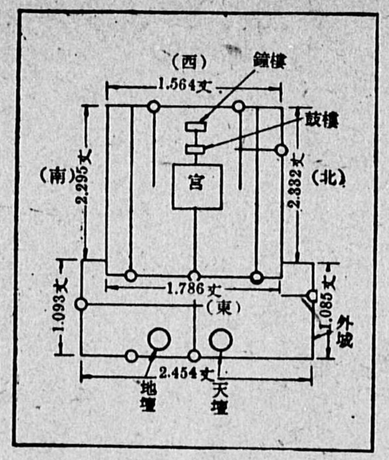
ウィボルグ（芬　蘭）

いづれも周邊の都市である。その中オーボは芬蘭の舊都であると云ふので、いさゝか異であるが、十九世紀中葉大火災に遇ひ全部改造したとある。然りとせば此の形式は頗る自然となるわけである。

此の他モスレンスク及びサマルカンドは迷路型であり、特異性を示し居る。サマルカンドは西部トルキスタンであり、スモレンスクは歐露の中心に近い。前者については稍々之れを人種的に推し得べきも、後者に致つては判定に苦しむわけである。

二、支　那

支那に於ける都市形態は



第一六六圖　北　京

縱　横　型

企　劃　性

自　由　性

放　射　型

であり、之れ等を發生的に殊別すれば又

露西亞系

ハンビン、大連等

滿　洲　系

北　支　系

中南支系

祖　界　系

日　本　系

と云ふ風に分ける云が出來る。

露西亞系は大體歐露系の都市美的放射型で、特に大連の如きは多心制でさへある。之れに對して北支系は殖民都市として正方形の城廓都市であり、中南支は不整形である。北市都市も幹線街路は大體骨組みとしては整形なるも、細部は迷路がうずめ盡して居る。然ふして支那系都市を通しての特異性は

城壁あり

城門に通ずる主街あり

中心部あり（城隍廟宮城等あり）

鐘鼓樓あり、牌樓あり

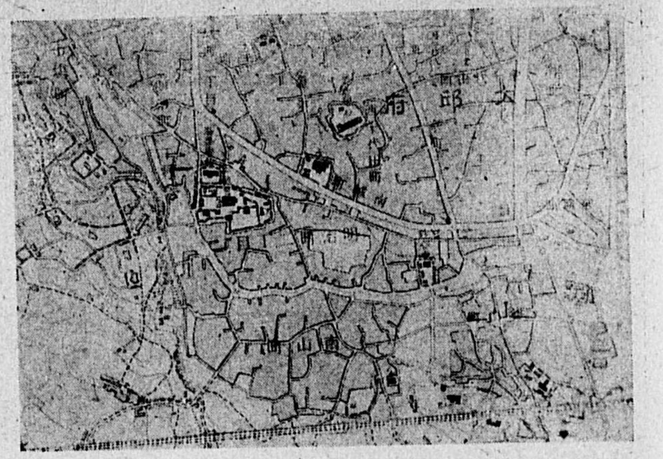
スカイランの美壯大なるものがある事である。

租界系と云ふのはかつての外國租借地で香港、上海、漢口、天津、厦門等である。海港都市であり建築公園共に歐風。特に水邊綠道（バンド）は必ず附帶し異色をそへてる。

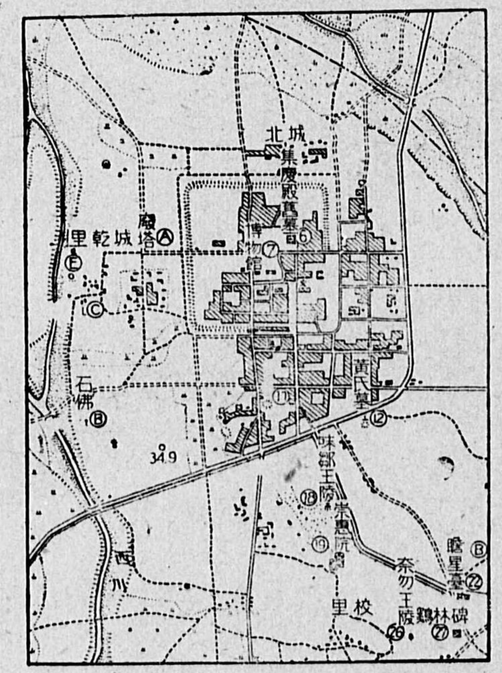
日本系は第一次滿鐵沿線に設けられた。當初は縱橫型に放射型を加へたもので、その放射の中心は驛前廣場で都市美制に準ずるものであつた。奉天、長春等々その例である。然るに滿洲事變來國力の及ぼすに從ひ新京、上海等の新形式都市が出現するに致つた。

此の他滿洲には地勢に於て特異條件を有するものがあり、それは吉林に發し奉天に致り南下して朝鮮を縱貫すると云はれて居る。その特徴は北部に山嶽、西部に丘陵、東部に清流、南部に平野を展開せるものなりとする。

朝鮮に於ては舊朝鮮都市は大體迷路型（大邸典型的）、その他滿鐵沿線都市の形式にならふものが交錯して居る。



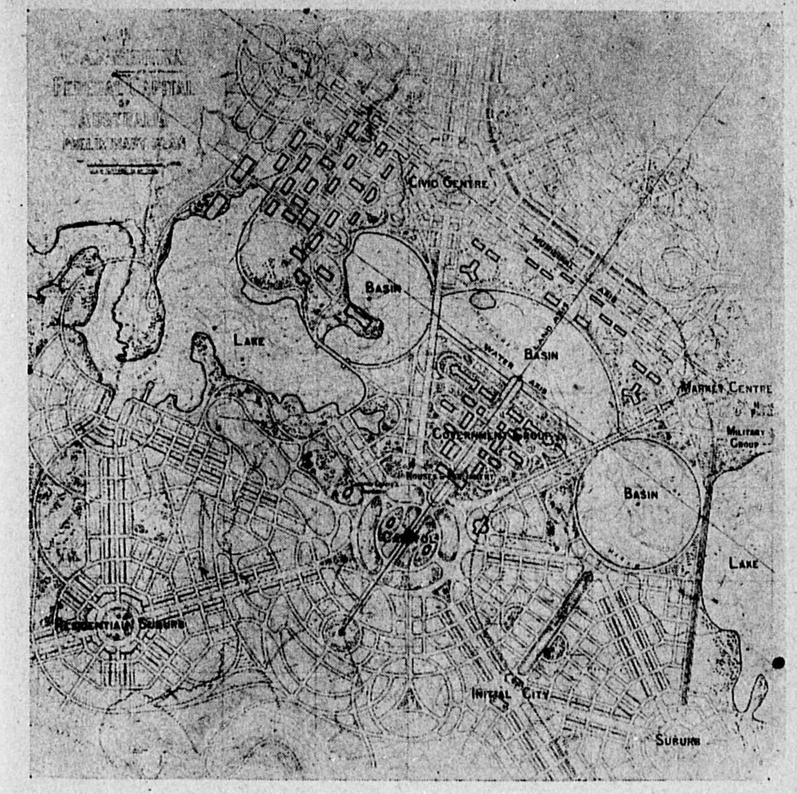
第一六七圖　朝鮮一大邸



第一六八圖　朝鮮一古都慶州

三、南　方

南方都市としては泰のバンコック（人口五六萬）、フィリッピンのマニラ（人口三七萬）、海峽殖民地の香港（人口一〇五萬）、昭南港（人口五八萬）、蘭領印度のバダビア（人口五一萬）、スラバヤ（人口三四萬）、佛領印度のハノイ（人口一三萬）、



第一六九圖　カンベラの細部

サイゴン（人口一一萬）及濠洲のシドニイ（人口一三〇萬）、メルボルン（一〇三萬）、アデレイド（三一萬）、ブリスベーン（人口三三萬）等があるが濠洲のそれを除いては、殖民都市として夫々の本國の形式を踏襲してる。

マニラはシカゴの計畫家バーナムの案と云ふが、大して特徴ありと思はれぬ縱横型である。

濠洲では人口は極めて少ないが、首都カムベラの計畫はもつとも特色がある。

アデレイドの計畫も一應のまとまりはあるが、結局に於てルネッサンスの縱横型である。

その他に於て強いて圖面上の特色を求めれば、バンコックは水濠と城壁によつて圍らせられて居る。

バダビアは和蘭本國の手法により水溝が都市を圍廓してる。

尤以上圖上の特異性に對し、都市景觀としては街樹その他のものに異風あるべき事云ふ迄もなく、建築物は總て日影を求めて供廓式となつて居り、室内又窓小さく極端に暗黑である。

四、印　度

古き文化の發祥せる國として當然印度も都市國である。從つてそこに幾つかの大都市を見出し得るわけであるが、之れを大別すれば

印度傳來の都市
歐洲殖民都市

となる。印度傳來の大都市は

アグラ　デーリ　ヲホール　ベナレス

等であり、後者の著明なるは

マドラス　カルカッタ　ボムベイ

等である。又印度特有のものとして夏期都市があり。

シムラ　ダージハン

等著明である。

印度傳來の都市にも亦次の二つの形式があるのが看取される。

圍廓都市（城壁を都市周圍にめぐらす）

無廓都市（城壁なし）

圍廓あるものにデーリ、ラホール、あり無廓はアグラ、ベナレスである。

此の中デーリ、ラホール、アグラは夫々廓の有無は別として堡壘を有つて居るが、聖都ベナレスにはそれさへない。然ふしていずれも迷路制である點、共通である。

歐洲殖民都市は總て同型で、

堡壘あり

圍廓なし

縱　横　型（但し整然たらず）

となつて居る。

以上は大都市であるが、小都市及び村落については資料を獲る事が困難であり、僅にマドラスの都市計畫報告書に乘せられたる文獻に從ふより仕方がない。

第四章　日本の都市

第一節　史的發展（內地に就て）

日本內地に於ける都市の發展は織田、豐臣以後城下町の形式に於てなされたと見なされる。勿論古代に於て中央に平城京、平安京が存し、地方に於ては「市」があり、夫々相當な賑ひが釀成された形跡はある。

例へば平城京の大路は幅各八丈均一、大路には柳を植へ

春の日に張れ柳を取り持ちて　大伴家持

見れば都の大路思ほゆ

等の嘆唱を與へ得る迄の都市的體裁はあつたと見られる。（小路の幅は各四丈）

又平安京は京城の周圍に羅城をめぐし、その垣の厚さ六尺外に七尺の犬走りと一丈の溝があり、溝の外に二丈の餘地を存して居たとされてる。いづれも一應の「都市」であつたらしい。

而ふして之れ等の精神中心は云ふ迄もなく大內裏であつたけれども、生活中心としては市場があつた。朱雀を一坊づゝ隔てゝその東西に一つづゝあつた。之れ等の中東市の狀況を唄たものとして萬葉に、

東市之植木丸木足左右不相久美、宇部吾戀爾家利

と云つてそこに樹木があり、それが橘の木であつたらしい事を示して居るとされてる。そして奈良の都の繁榮とは結局此の市の狀況であつたとして居る。

平安京に於ても同樣東西に市があり、東市五十繩、西市三十三繩賑盛を極めた(但し西市は天元五年頃には〇徴)。その狀は六條道場繪卷及び年中行事繪卷等によりうかゞひ得る。

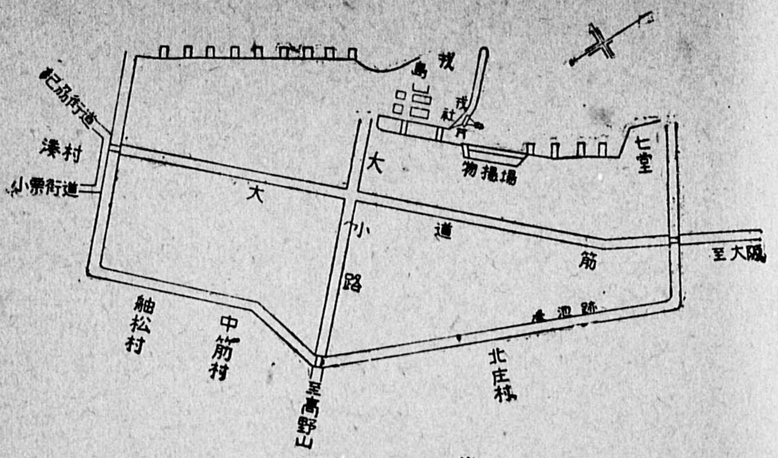
仁和頃には宮中より又延喜頃には多くの貴族迄が日常市に出向した樣に推せられる所を以つて見ると、それは今日の中央卸賣市場とは別の性質のものであつた事が推せられる。勿論此の頃は市場取締は完備し、祭神等を祠り整備して居た。地方の市も結局その地方の消費の中心であり、それがいかに肩摩コクゲキであつたかは、寧樂時代の海石榴市(太和)に對する次の歌がある。

紫者灰指物曾海石榴市之八十衢爾相兒裁誰

その他輕市(太和)に於ける柿本人麿の戀歌、阿部市に關する戀歌、風土記に示されたる記事等によつても古代市が男女相歡の場所であつた事が推せられる。だゞ、それにしても帝都以外のものは恐らく臨時性のものであり、その聚落形態も貧しきものであつたに違ひない。その中海外との取引が出て來るに從ひ博多、堺等が勃興して來た。殊に堺は町の制度等も頗る完備し文化も榮へた。

例へばその町内組織は頗る歐洲中世都市に近似し、納屋衆(或は納屋貸衆)なるものがあり、此は時に三十六人の有力なる都市重役であり、此が自治制度を固め時に防衛の手兵(浪人)を有つ樣な事さへあつた(結局に於て之れは現大阪の前身である。之れの沒落は鎖國制度以來)。

然し、何にしても零々たる都市部門が俄かに活氣を呈するに致つた一つの理由は、天文十二年種子ケ嶋に銃が渡來し我國の築城法、甲冑その他が總て之れに對應する樣改められ結局、山城式築城法が平城式に變つた。——事であり、他の一つは產業部門の發達が(特に手工業の)商業を必要とする迄に高まり、商業を掌握する事が戰爭目的となつて來た所以でもあらう。かくして諸侯は爭つて自個城下の市街建設に邁進した。



第一七〇圖

從つて之れ等は殆ど全部計畫都市であるか、少くもその中樞部が計畫都市で自然發達部が之れを取り卷いてると云ふ形である。たゞ之れ等の都市的形態は誠に無味で、一種の商業ギルドが存在して居たので、その職能配列を行ひ、いさゝか今日の都市計畫地域制を先驅して居たにすぎない(火災を誘發し易きものを風下にと云ふ程度の)。

街構的特徴としては基盤制であり、その中に屢々防戰用の迂曲線及び防火用の廣小路(江戸、名古屋等に)をを交へた程度である。

城壁については此が都市をかこめるものは甚だ稀であり、その稀なる團廓都市の例は左の如きものであつたとされてる。

水　廓　結城(享保十五年頃)　甲府　飯田　小松(石川)　上野

土　廓　岡山　德吉(伯耆)　堺　博多

石　廓　足利　小田原　岩槻　京都　豐公後の府内(水廓を併せる)

若松(會津)　伏見　姫路　鳥取

唯かくして興味深く思はるゝは、例へその意味に多少の輕重はあるにせよ、圍廓都市、市場、市民的自治制等々大なり小なり我國に於ても、之れを求める事が出來ると云ふ事である。更に又西村眞次博士がその著日本古代經濟の高市に於てそこが市であり又、會議裁判、儀禮の場所であつた事を示すに致つて、希羅のアゴラにさへ類する事が解る。

かくして我々は都市構成の純粹形式に於て東西大差なき事を感ずるのである。

（中世堺が全く典型的な世界型の商業都市として自由都市的型體を有つた事は有名であるが、同樣の傾跡が桑名、尼崎等にも顯はれて居た事について、渡邊英三郎氏が指摘して居る――都市問題、三十三卷、三號）

第二節　地理的諸相

日本に於ける都市の地理的諸相の中、內地のそれは都市が急激なる發達によるものである所から殆ど同一形態である。唯殖民地に於いて初めて異色を見る。即ち朝鮮に於ては

城　廓

完全なる迷路

滿洲的都相選定

北、西部丘陵山地　南部平野　東南部河川

しばしば方形都市

等の特徵を見る。

之れは明に大陸系の都市である事を證してる事になる。

又臺灣に於ては實に珍らしく、

支那系都市と共に（殆無なし）

都　心

綠道的環狀道路

等の完成されたもの、及び建築としては

停　仔　脚

なるアーケード式なるものを見る。又その建築材料は全く內地と異なり

練　瓦

である（地方によつては木造）。

第五章　大東亞新興都市計畫

嘗て都市計畫は沈滯行政の歴史であつた。然るに總てのものを淨化し强勢する戰爭は、我國に對してもその作用を働かせ、都市計畫界は且てなき活躍を展開して居る。然ふしてその主要動向は大體次の三方面に分けられる。

内地大都市の都市計畫
内地新興工業都市の都市計畫
大陸都市の都市計畫

第一節　内地大都市の都市計畫

内地大都市に於いては明に都市計畫技術は飛躍した。それは一つは國土計畫運動に誘導せられた事と、も一つの原因は防空上の緊迫せる空氣の强導である。此の兩者はやがて一致點を見出し、一つの働の内外二面として都市計畫を支配し出した。

云ふ迄もなく――特に我國の都市は完全なる自由主義的發展を志して居た。それに對し都市計畫は、中小都市に對しては助勢、大都市に對しては、その自由主義の副作用たる諸都市悪を匡正せんと働いたのである。

併しその匡正作業も大潮の重壓には抗すべくもなく、總てが結局に於て自由主義前導の形となつた。之れは都市計畫技術者達の慚愧であつた。都市計畫技術者達は此を慚愧すると共に、たへず正統都市計畫擡頭をうかゞつていたのである。その機をゆくりなくも與へてくれたのは滿洲事變以來の國家體制即ち「戰爭」であつた。

戰爭は當然我國に食糧及び工業の自給を强いた。又戰爭は國土の防空體制化を求めた。又併せての人口計畫は結局に於て都市計畫當初來の夢であつた所の

大都市の疎開
その抑制散開
地方小都市の建設

に對し實現の途を拓き與へたのである。

即ち國土計畫及び防空計畫に對する危殆感は汪然として自覺される、遂に昭和十七年防空法の一歩前進により大都市の工業規制となつた。都市計畫技術者は此の流れに乘つて、日本國土の根本的な更正作業をやる可く立ち上つたのである。

防空法により規制されたる都市

東京市　八王子市　立川市　京都市　大阪市　堺市　岸和田市　豐中市　布施市
池田市　吹田市　泉大津市　横濱市　川崎市　平塚市　鎌倉市　神戸市　尼崎市
西宮市　芦屋市　伊丹市　川越市　川口市　浦和市　大宮市　名古屋市　下關市
若松市　八幡市　戸畑市　小倉市　門司市

之れは結局に於て

大東京　名古屋　京阪神　北九州

の四地方に終るのであるが、之れ等の地方に於ては工場面積二〇〇〇平米、常時使用の原動機馬力二〇〇をこへる工場は新設增築に際し、地方長官の嚴密なる審査を要する事になり、その結果許可不許可が決定される。

此は必要あれば「工場面積六〇〇平米以上、馬力數五〇をこへるものも制限する」區域を設定する事も出來る樣になつてる。

斯ふした程度の制限は勿論國土計畫的に滿足すべきものでなく、又此の規制區域も國土計畫的には多少の修正を必要とせられる樣にも見へる。從つて之れは「暫定措置」なりと云ふ事になつてゐる。

何はともあれ之の「一歩」は大きい。之れに勢づけられ、地方の都市振興が行はれる事になれば、國土計畫は容易に實現を見得る事にならう。之れ等防空計畫については拙著「戰爭と都市」を參照せられ度く、また國土計畫については同樣「國土計畫——生活圏の設計——」を參照せられ度い。いづれも

大都市疎開抑制分散

學校、工場の處理

空地地區、綠地地帶等により

市中の再構成

防空帶

空地地區等により

地方都市の振興

等を主要題目とし解說して居る。恐らく我國の大都市都市計畫は、之れにより全面的に國土計畫の下位計畫として再編せられるのでははいかと思はれる。云ふ迄もなく之れこそ「民族の爲」の都市計畫でなければならない。

第二節　內地新興工業都市の都市計畫

內地都市計畫に於ては現在「新興工業都市」なる名稱の本におびたゞしき都市が建設されつゝある。その殆ど總てが既成都市より若干の距離をへだてたる土地への新都市建設であり、又その殆ど總てが何等かの意味に於て大工場建設を豫定し、地主の區劃整理によつてなされつゝあるのである。

之れは地方工業化に强き影響を有する所から國土計畫の一翼なりと考へられて居る。

(イ)　東北

宮城縣——仙臺市　名稱「仙鹽地方」整理面積四二九ヘクタール（事業面積同）工業費二一〇萬圓、執行年度昭和十六年—二十二年

(ロ)　關東

茨城縣——多賀町　整理面積八二五ヘクタール（事業面積三四三）事業費三九〇萬圓、執行年度昭和十五—二十一年

神奈川縣——相模原町　整理面積一、六八四ヘクタール（事業面積一六九）事業費五七五萬圓、執行年度昭和十四年—二〇年

千葉縣——千葉市　整理面積四四三ヘクタール（事業面積二二一）事業費二七五萬圓、執行年度昭和十六年—二十一年

埼玉縣——川口市　整理面積四七四、一ヘクタール（事業面積同上）事業費一一八萬二千圓、執行年度昭和十五年—十九年

群馬縣——太田市　整理面積二、〇一四、九ヘクタール（事業面積三、八一八）事業費一、二六四萬九千圓、執行年

度昭和十五—十九年

（八）中　部

愛知縣——擧母町　整理面積二二一ヘクタール（事業面積二二一）事業費一七二、七萬圓、執行年度昭和一五—一六年

勝川町　整理面積二五八ヘクタール（事業面積三五一）事業費二〇〇萬二千圓、執行年度昭和十六年—二十年

豐川町　整理面積二、七二七ヘクタール（面積二五八）事業費八九八萬圓、執行年度昭和十五年—十七年

三重縣——四日市市　整理面積二〇〇〇ヘクタール（事業面積三〇九）事業費四一一、四萬圓、執行年度昭和十五年—二十年

富山縣——東岩瀬　整理面積三八六、六ヘクタール（事業面積三八六）事業費八〇七萬圓、執行年度昭和一四—一六年

（九）近　畿

京都府——宇治町　整理面積六〇〇ヘクタール（事業費面積六八四）事業費三九八萬圓、執行年度昭和十六年—二十年

和歌山縣——和歌山市　整理面積四五三、七ヘクタール（事業面積四一九）事業費三〇九、六萬圓、事業年度昭和十七年—二十年

福岡縣——春日原町　整理面積一、〇〇八ヘクタール（事業面積同上）事業費五六九、八萬圓、執行年度昭和十六年—二十五年（以上面積は總てヘクタール）

その他を入れて全國十六ケ所、之れ等の設計は夫々土地事情その他により特異なるものがあるが、總じて土地區劃整理による土地分譲が基本問題となつて居り、その結果計畫に飛躍性を求めるわけには行かない。從つて街路計畫もその多くが手堅き縱横構に終り易い。

勿論その中に幾つかの優れたる造型的なものはあるが、二三の中には造型技術としては交通及生活の分離未だしく、自から「交通中心」主義となり、生活育生地域の所在を認め難いのがある。

唯一般に綠地の理解進み綠道綠地帶等により市街を分劃することは行き渡つて居る。多賀、宇治等その點明確であるが——之れは更に進んでその他の生活計畫と相合せて構想を發展せしむべきであらう。（海岸、河畔等を綠化した美しいのもある）

又宇治その他二三のものは學校敷地を整然と採つて居るのは進歩である。最も特色あるは群馬縣太田の計畫で、之れは區域内を三大工場專屬の聚落とし、三つの聚落に分かちその中間を綠地帶として居る。之れは恐らく新興工業都市の形式の中最も大膽にして且進めるものと見可きかも知れない。

とまれかゝる國策事業が地主の利益により計畫を左右される事に疑問がある。之れは矢張り國策營團等により一應土地を買收し、（地券等を發行）地主は配當を限定されたる投資者として、その差額の益金により都市及びその影響區域の福利施設を爲すべきものであらふ。

第三節　滿洲國及北支の都邑計畫

之れについては都市問題會議第六回總會に於て、その特異性を沼田都邑計畫科が次の樣にのべて居る。

「滿洲では土地經營の方針をとつて居る。

從つて土地經營に必要なる土地は强制的に事業執行機關に買收せられると云ふ點がなければ事業に要する費用を拾出する途が他にない」

かくして都邑計畫法の施行せられたものは八〇あり、その中二七が土地經營を爲してる有樣で、その費用は昭和十七年迄に六千七百萬圓と云はれて居る。

一、新　京

新京は云ふ迄もなく大滿洲の創設首都である。京都、奈良、ワシントン、デーリ、カンベラ等と共に世界に勘なき首都創設の一例である。大同二年の着手。

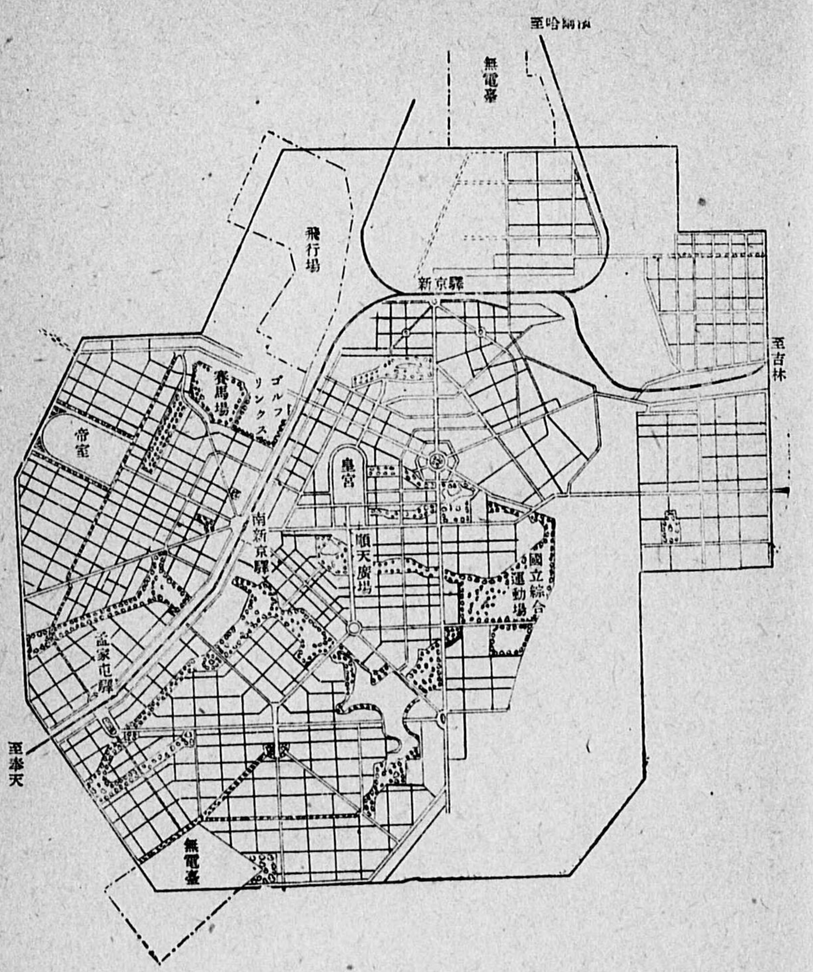
人口は五〇萬を目標（大同二年一五萬）とされた。此の都市建設の爲には國都建設計畫法が制定せられ（大同二年）その中には土地區劃整理（第十條）の條項が特記せられて居り、それは步減二割を趣ゆる部分に對しては、補償（第十四條）を爲すと云ふ新しき形式になつて居る。

又當然沼田氏の云ふ所の土地經營の爲の土地の收用（第十七條）の條件も揭げられて居る。「計畫區城は二〇〇平方粁」「事業區城一〇〇平方粁」「實地積七九平方粁」

と云ふ事になつてる。

又、區域內を地城制で區分する事我國同斷であるが、たゞそれは住居地域（一級、二級、三級、四級）商業地域、（卸賣、小賣、商館）、工業地域（重工業、輕工業）、特種地域（蔬菜、牧蓄）及び雜種地域の樣に細分されて居る。

國都建設計畫豫算は



新京第一都邑計畫圖

支出	五ヶ年合計	三〇、五九六、〇〇〇圓
	中土地買收費	七、二〇〇、〇〇〇圓
收入	貸地料	二、〇〇〇、〇〇〇圓
	土地賣拂金	二二、五〇〇、〇〇〇圓
	土地增價稅	六九六、〇〇〇圓

と云ふ樣な事になつて居る。土地買收は、

康德四年十一月大體完了	九四平方粁	九、〇〇〇、〇〇〇圓
同年迄の賣却	一、四四平方粁	入金　一七、〇〇〇、〇〇〇圓

の計畫で着手された。賣立の地價は、

商店街	二〇圓
住宅地	八圓

と云ふ廉さである。設計上の特徴は造型的な點で、大同廣場、南新京驛等が美しき放射道路を形成して居る。又綠地々帶の配置も放膽で市中には放射狀のベルト、東新京の工業衞星都市間には、伴通河を含む大ベルトが介入せられて居る。然ふして市街全體の外をかこむで環狀道路が描かれてる。

又城內の東端、工業地域に近き新天地享樂地域があるのは珍らしき手法である。

二、ハルビン（昭和十四年の報告書）

ハルビンは一八九八年來の都市である。久しく歐羅巴風な特異な都市的性格を誇つて居たが、滿洲國が建國せられるや直ちに日本都市計畫技術者により新しき出發をなす事になつた。その豫想人口百萬（康德五年四十五萬）。

都邑計畫區域は市街計畫の中心より二五粁の區域一八三七平方粁で、その中に衞星都市を見込んで居る。市街計畫區域は半徑一〇粁、三一七平方粁である。その四八％が公用並公共用地（道路及び廣場、公園等二八％）である。

第一期事業は豫算一六、〇〇〇、〇〇〇圓で、大同二年より康德四年に至る五ヶ年事業として着手されたが、それは康德四年豫算更正二八、一二〇、〇〇〇圓となつた。財源は市債一、九七〇萬圓、土地收入八、三五萬圓を以つて宛てる。その土地買收計畫は面積七三、四九四、〇〇〇坪、費用三、二〇〇、〇〇〇圓である。

之れ等に對しハルビン當局がハルビン都邑計畫の特異性と稱してるものは次の樣なものであるとされる。

（イ）、廣汎なる都邑計畫區域を設定した結果

衞星都市の育生を豫定し

郊外公園を採り

防衞用地を採り

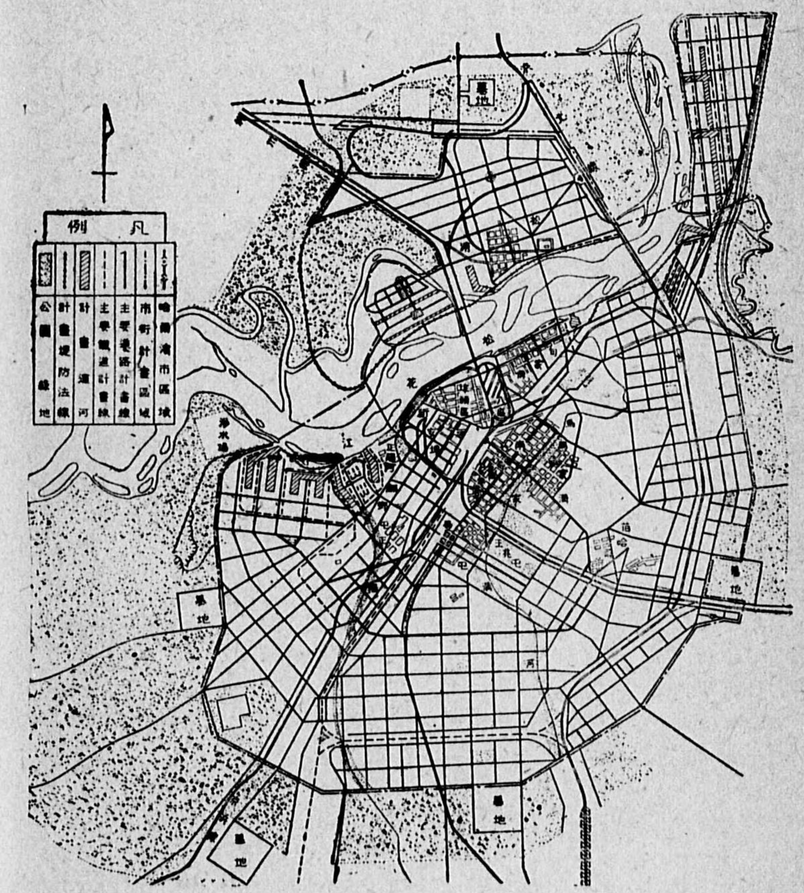
都市と近隣農村との依存關係を考慮する

事が出來た。衞星都市は沈家王崗驛（九粁）、平房驛（二〇粁）の夫々に先ず撰定し、自動車道で連絡（バス）する事にした。

（ロ）、母都市の市街計畫區域の制限

母都市の市街區域を半徑約一〇粁以內とし、その外周を幅二粁の環狀綠地で圍繞した。

（ハ）、市街用地の全面的公營



ハルビン都邑計畫圖
第一七二圖

市街用地を全面的に公營にした。

「蓋し之れは都市の發達は一面に於て地價の騰貴を招來し、他面に於ては各種の公共施設を要求すると云ふ事實に鑑み、公共施設に必要なる財源を直載簡明に地價騰貴の差額に求めんとする趣旨に外ならぬのである」

と主張してゐる。

昭和八年市街計畫區域及び沈家王崗大農公園區域の民有農耕地及び荒地の殆ど全部を二二〇平方粁買收した。

總額　三二〇萬圓　坪當　四錢三厘

次で昭和十一年及び十三年國有地近郊地の全部及び既成市街地の大部分面積五六平方粁を七五〇萬圓で買收した。

かくして「いずれの土地を如何なる用途に充つるも自由となつた」とのべて居る。(新陽區並に西馬家溝に約八萬人を收容し得る市街地區を築造す)

(ニ)、幹線道路の太きも特異なりとして居る。主要なるものに一二〇米—一〇〇米と云ふのがある。

(ホ)、建築面積と敷地面積との比を豐かにとつた。南崗區は一五%—二〇%と云ふ比率である。

(ヘ)、森林都市造營の構想で計畫の實施に當つた。

三、奉　天（康德五年の報告書）

奉天は云ふ迄もなく滿洲の舊都、今も尙滿洲第一都である。

滿洲國としての新しき計畫は人口增加率年六%として、康德一〇年一〇〇萬人、康德二〇年一五〇萬を計畫人口とする。都邑計畫區域は小西邊門都心區より

東　方　約　一五、三粁

西方	一二、七
南方	九、五
北方	七、九

面積四〇〇平方粁とする。

市街計畫區域はその中一九二平方粁とし、その周圍に七粁—一粁幅の環狀綠地帶を設ける。街路の比率は全面積に對し一〇%（但し、純粹市街區域に對しては二五%）公園綠地は一〇・八%である。

こゝで特異性のあるのは、觀樂境の指定で既成市街地中南市場及北市場をそれに指定した。

尙擴張區域に對しても五ケ所を劇場、妓館、娛樂場の集合地として指定した。此等の第一期事業（康德四—八年）は

經營土地面積	二、三二二萬平米
計畫人口	十三萬人
買收土地	二、二二二萬平米
總費用	四、一七七萬圓（康德九年迄）
その中土地買收費	七一二萬圓
同施設費	一、七三五萬圓
收入の中土地賣拂	二、四五一萬圓
土地賃代と收入	七五七萬圓

と云ふ樣な規模になつて居る。

四、佳木斯（康德五年の報告書）

此は淸の雍正十年來二百年の都市である。新しき計畫では康德三十一年に人口十八萬になる事を豫想としてる。都邑計畫區域は七、一五〇萬平米であり、その中市街計畫區域三、三一六萬平米となつてる。（舊市街二八〇萬平米）計畫地域比率は

	市街地區域に對し%	都邑區域に對し%
商業地域	一五・三	七・一
住居地域	三八・三	一七・八
工業地域	五・九	三・八
臨港地域	〇・九	〇・四
綠地域	—	三〇・九
その他	三九・六	四一・〇

となつて居り、綠地域が割合に大きい。

第一期都邑計畫事業は康德元年より同四年にかけて行はれる。

土地買收面積	二千百七萬平米
土地賣却面積	十五萬平米
土地貸附面積	七十六萬平米
土地買收費は	二十一萬圓

宅地賣却費　十二萬圓
貸地收入　四萬圓
小作收入　三千圓

第二期都邑事業は三百萬圓の豫算でその中

土地買收費　三萬圓
施設費　二二〇萬圓

となつて居る。佳木斯の場合はハルビン、奉天等と異なり、

「地方都市としての態容を整へれば足る程度の建設を目標に置いた」

「即ち街路は主としてマカダム舗裝とする」

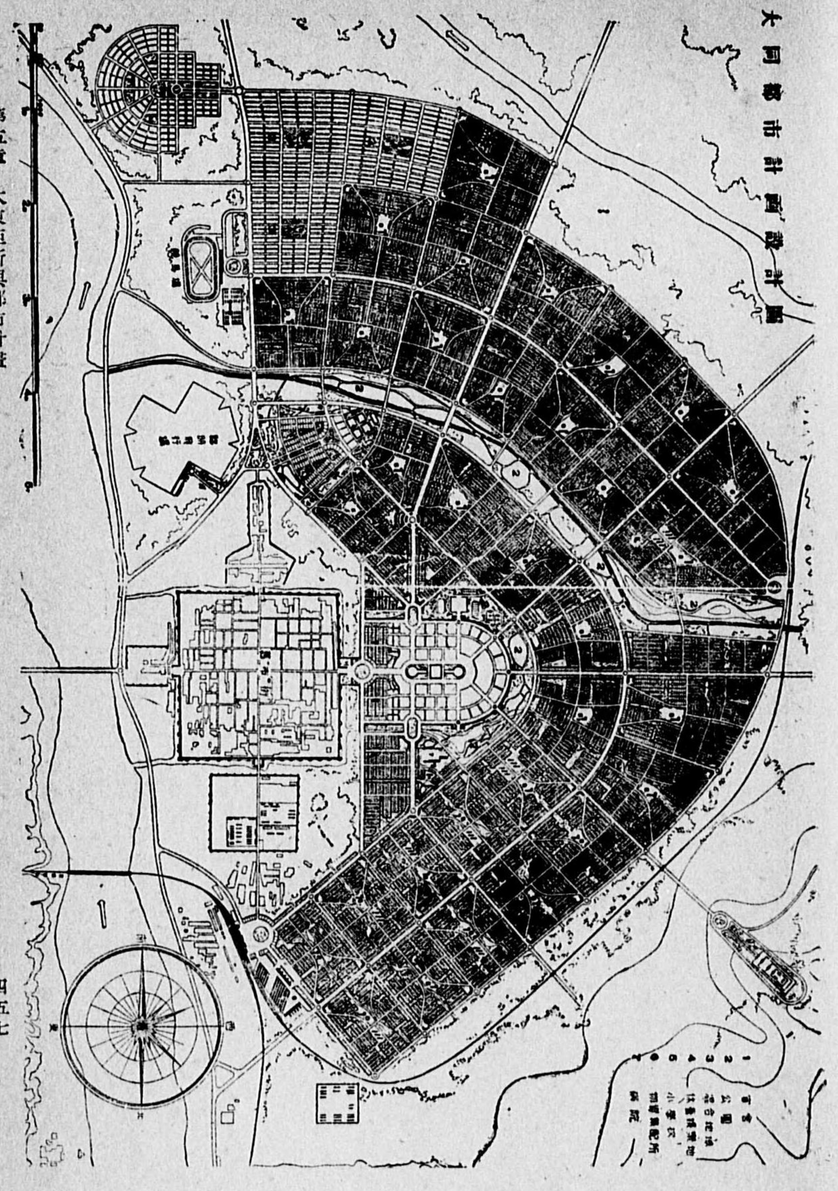
と云ふ樣に好き小都市を造らんとする所に特色が見出される。賣却の時の地價も平均特等地一平米五・三圓、一等地四圓、二等地二・八圓、三等地一・六圓、四等地〇・五八圓――と云つた樣なものである。

五、大　同（昭和十四年の報告書）

之れも衞星都市の構想によつてる。設計者內田祥三博士及び高山助教授に聽くならば「大同は理論的にも地理的にも工業都市たらしむべからず」となし工業都市、炭鑛都市を一の粁位なとこに衞星都市的に配するを適當なりとして居る。その中に石佛寺もある。

大同都邑計畫の概況は先づ既存の大同方一、八〇〇米の城市にはふれず、全然新設する事にしてる。

新市將來の人口は二〇萬を一應の限度とする。之れを五萬、一〇萬、一五萬、一八萬の各發展段階に分けて考へる。（發



第一七三圖

展は都市區域から外へ同心圓的の地帶にて行はれる)「都市の發展が中絶した時にも一都市の形體を保持し、多くの障害を生ぜしめぬ樣」と云ふ配意である。

人口密度は宅地五〇〇平米、卽ち一人當一〇〇平方米と云ふ計畫で、新市街全體に對しては一戸當一、〇〇〇平米、一人當二〇〇平米と云ふ事になる。

第一期事業は民地九九〇萬平米、公用地九九〇萬平米の上に考へられる。その人口一〇萬。

第二期は一、六〇〇萬平米の地域に於て人口八萬として考へられる。

大同の計畫に於ける特徴の第二は市中の近隣單位的構成である。之れに對しては「一朝有時の際にも小學校を中心として避難集合し得らるゝ」爲なりとする。小學校兒童を人口八人につき一人とすれば、人口五、〇〇〇に對し六〇〇の兒童數となり、之れが一小學校區域を成す事になる。卽ち一〇〇〇戸を以つて一近隣單位となすべしとする。その面積八三萬平米、九〇〇米平方の地域である。

財政計畫としては人口十八萬人に對し三、五〇〇萬平米の土地を買收し、更にその周圍に七、三三六萬平米の土地を買收し、綠地地域となすべしとする。然ふして又之れを二期に分かち、第一期は十二ヶ年間に十萬人を容れるに足る地域を構成する。

順調にゆけば此の第一期事業費三〇〇萬圓で、一年後には第一期區域の完成は勿論第二期分を買收し、施設する丈の事が出來るとしてる。

六、結

かくして以上の結をとれば明に大陸都市計畫は、內地在來のそれに對し一籌を輸して居る。特に著しきは都邑區域をとれる事、之れは一種の地方計畫區域の考である。

衛星都市を考に入れてる事。

土地政策を徹底せる事。

市街地計畫に於て大膽なる造型計畫を施せる事。

充分なる綠地地帶を取り都市を分劃せる事。

慰樂地帶を意域的に計畫育成せる事。

等である。又若しそこに多少の遺憾の點ありとすれば、

造型計畫が交通計畫と分離せざるものある事

隣保單位的な變化なき事（大同は別）

等であり、更に加ふべくばかゝる新設都市にして尙、

頭初より旣成都市修正の如き手法をとれる事である。

又土地政策が結局全面買却制度をとれる事もいさゝかの殘念を殘す、出來べくば九百九十九年貸與の形式にても永久公有の形を採つてほしかつた樣に思ふ。

而して個々の感想としては新京の華麗、ハルピンの雄大等々なるに對し、小都市ながら大同の行き汎りたる面白さに感心せざるを得ない。殊に後者は隣保單位を着眼し得たるは小都市の故とは云へ、推賞に値する樣に思へるのである。

第四節　上海都市計畫

上海の都市計畫が樹立されたのは第一次は昭和十三年で、此は租界接收前なのでその對策の意味濃く計畫された。尤も之れは日本の計畫前に蔣政權によつて一應同樣趣旨計畫を見た。同政權の案も結局租界對策であつたのである。

然しそれはその一部を實現し市、政府その他の建築を殘して未完成のまゝ停止となつた。

今や租界を併せての綜合計畫が考へられつゝある次第であるが、こゝにはその既に修正の氣運に際してる第一次のものについて要旨を掲げる事にする。

先づ大上海都市の區域は十五粁を半徑とする。(蘇州河口を中心)その中の第一期都市計畫事業は七、五五〇萬平米の區域である。區域内を次の樣な地域に分ける。

第一住居地域
第二住居地域
第一商業地域
第二商業地域
第一工業地域
第二工業地域

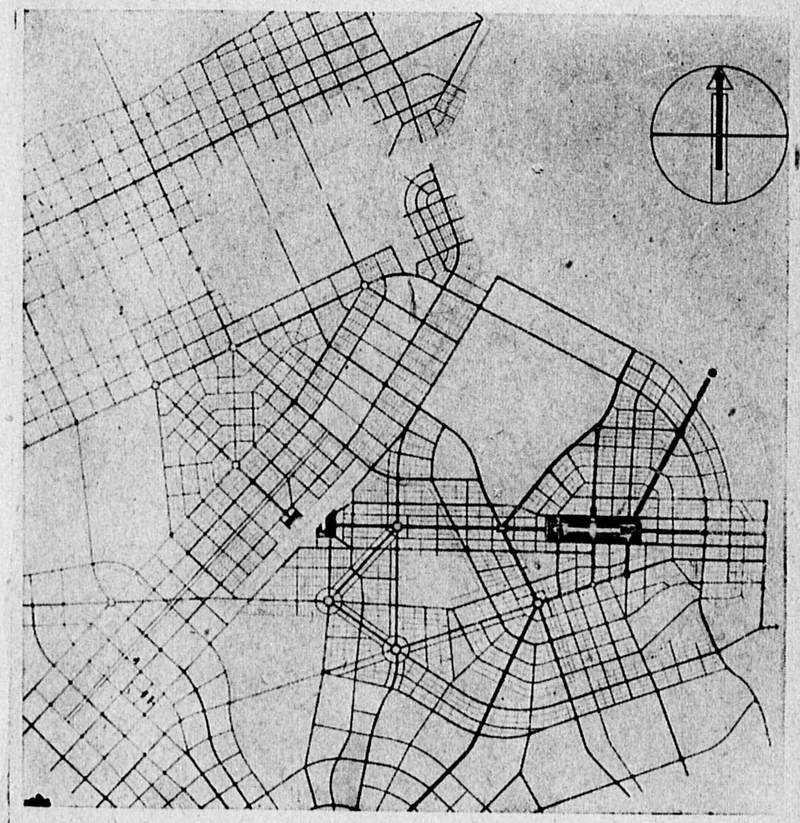
此の第一次實施事業となつたものは更に又その一部で、用地取得及び工事諸施設の實施期を九ケ年とし、土地拂下の實施を十ケ年總工費一億一千二百三十萬圓と云ふ規模で着手される事になつた。

その内容は

土地總面積	一、三二八萬坪
公用地	四五六萬坪
留保地	二五五萬坪
特殊地	三二萬坪
拂下地	五八五萬坪
事業費	
總額	一億一千二百三〇萬圓
土地取得	三千萬圓
維新政府出資	七五〇萬圓
一般土地取得費	二〇〇〇萬圓
整地費	二五〇萬圓
工事費	八千二百三〇萬圓

と云ふ事になつてる。事業資金は土地取得費二千萬圓の中半額現金、半額を社債と云ふ事になつてる。

工事費の中に彩票益金が入つてるのが特異性を有つてる。之れ等の仕事を爲す爲中華民國二十七年上海恒産株式會社が設立せられた。資本金二千萬圓(中、中國政府一千萬圓土地の現場出資、中支那振興五百萬圓、在上海紡績會社その他五百萬圓)である。



上海都市計畫圖

第一七四圖

以上に對する技術的な計畫の大要は租界上海を中心とし、半徑十五粁圏内に於て都市整備を爲すにあつたが、その計畫要旨は何としても第一期上海都市計畫區域と云ふ、黄浦江入口左岸一帶に汎る都市建設にあつた。

之れはあたかも黄浦江入口にそゞぐ吳淞クリークを改修し、工業港及工業運河を設け之れに工業區域を造成する事を第一の眼目とし第二には既に蔣政權が着手して居た所謂市政府附近の半成都市を育生し第三には吳淞クリークと租界上海の中間にある虬江碼頭を利用して新らしき商埠を築き。更に市政府西方に新中央驛を建設する事を併せ、その間に新都市を建設するを目圖としたのである。計畫規模は極めて大膽で吳淞工業港には大型船舶を接岸碇泊せしめる。市政府を中心とする都市には八〇萬平米の大廣場を附し、之れより黄浦江岸に向け幅一〇〇米の紀念道路を設け、江上より直に新市域の偉容をうかゞはしめんとする。

又、虬江碼頭一帶を新商業中心とし、此こと新驛附近に特殊慰樂地帶を設け、市街全體を綠地帶にて分劃し、特に舊市街と連擔するのをさける爲、租界との間に廣大なる綠地地帶を設ける。

以上所謂新都市區域の計畫に對し、全上海計畫は未だ粗計畫のまゝであるが、その要旨は浦東、眞茹、閘北西北部、蒲淞東部、新龍華等を夫々衛星聚落的に計畫し、上海を圍繞せしめるにある。

而ふしてその聚落の夫々は計畫形式を異にし、且いづれも市民の交歡生活に便ならしめる樣中心及び廣場を與へられた。勿論之れ等各聚落を相互に結び且之れを上海市中と連結せしめる爲の環狀放射の組系は試みられて居る。

かく全構成を終つて改めてそこに必要を感ぜしめるのは、新設都市と舊上海との連絡交通機關である。自分は之れを自動車道路なりとしたのであるが、現實には地下鐵道の氣運が動いた。

免まれ此の計畫も、今にしては過去のものとなつた次第である。

後記

省れば自分の國土計畫的都市に關する著書も此れで十册になる。少し濫作のきらひがないかと云ふてくれる人もあるが、然し「此れ丈世に問ひ度い事があるのか」と考へてくれる人もあつて好いとも思ふのである。それはとも角も、一册「國土計畫後防空都市計畫の報告」をまとめて、そこで一應の休みにし樣と思つて居る。

尤それとて登山の樣なもので、此れで最後と思つた峯の展望が、更に第二の峯を以つて呼びかけないとは限らない。それも亦可である。何にしてもこゝで「十五分間の休憩」を採る事になる。

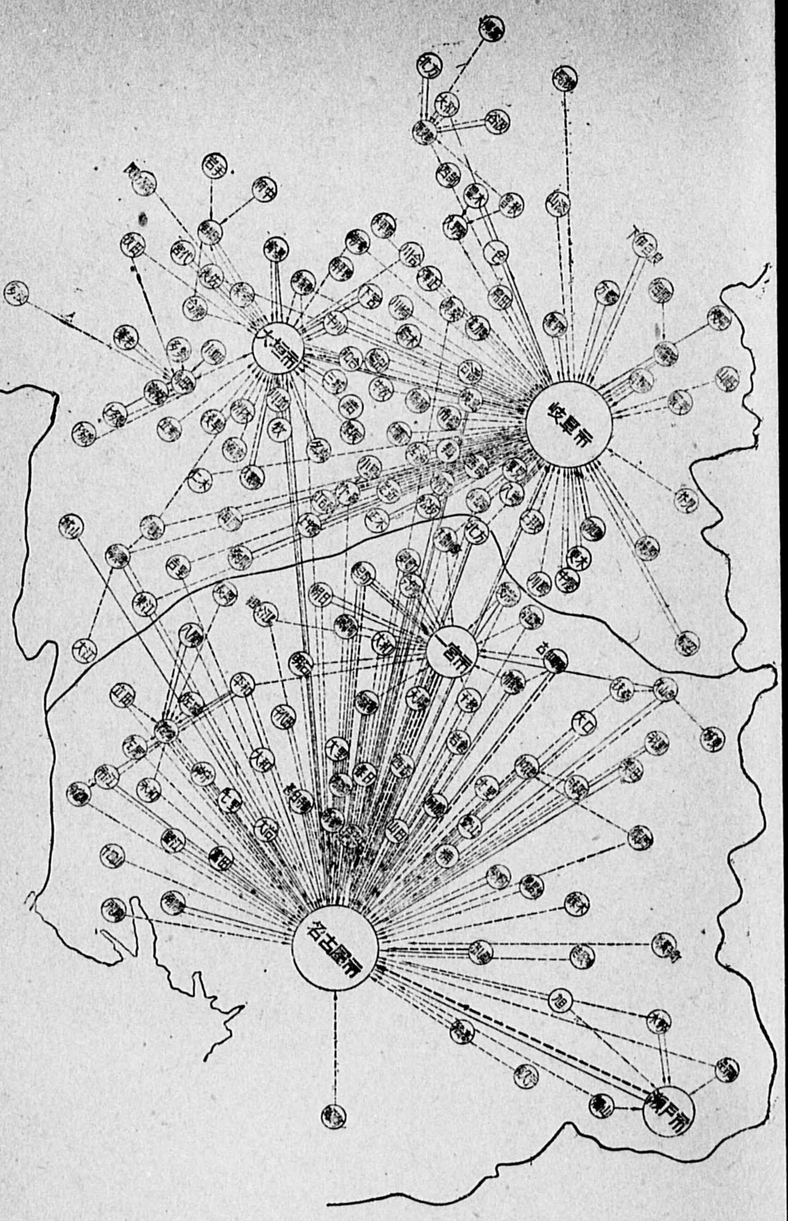
紫煙に託し、獨行登山の快を心ゆくまゝ味ひ度いと思ふ。此をした際にいつも自づと口にでるのは母校二高の校歌である。「空は東北山高く」それがどの位恩師の心となつて激勵しなぐさめてくれるか解らない。實に此の校歌は自分達にとつて永遠の「父の子守唄」である。しかも此の歌の好さは、それが先輩にして詩人なる晩翠の作である所にある。

從つてその中に流るゝものに晩翠の詩の本質なる悠久へのあこがれがあるのである。

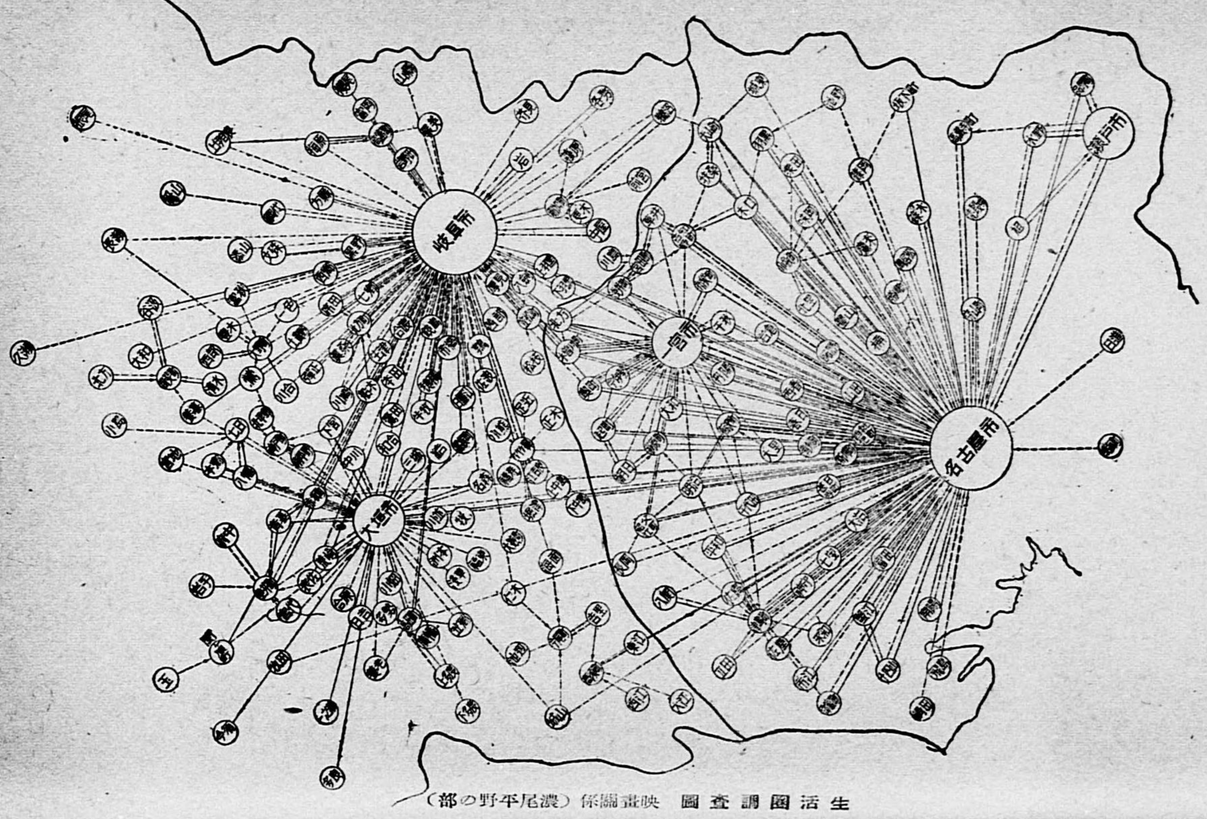
（晩翠の詩を悠久へのあこがれと捉へないと晩翠は解らない。此の悠久こそは藤村、白秋、光太郎その他の詩人達の有ち得なかつた高き感情である）

此れがいつしか二高の性格になつて居なかつたであらうか。世間で云ふ「二高の鈍」の中にあるものこそ「物憶ふ石」の如き「悠遠なる原始の感情」ではなかつたのであらうか。それを今にして氣づくのである。

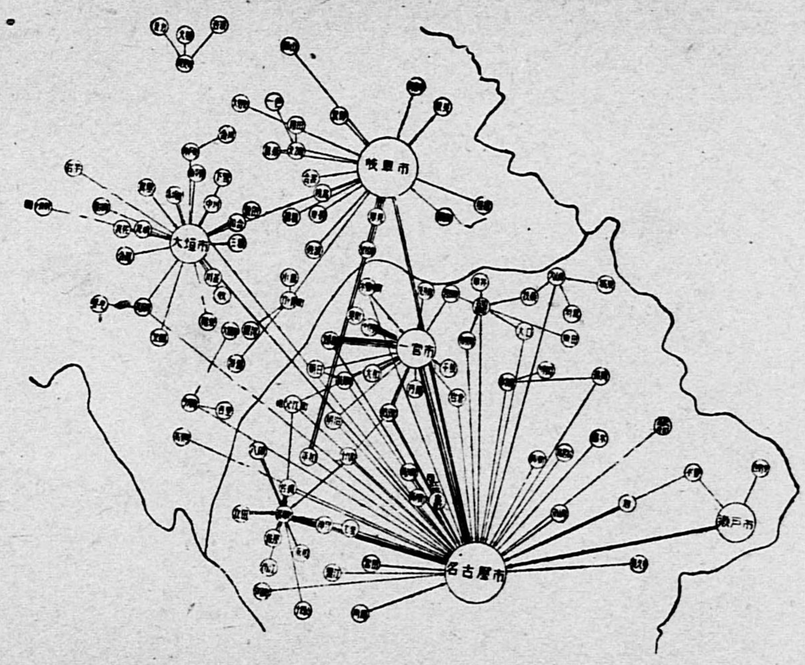
何にせよ。例へその峯がいかに低からうと、それを征服した氣持はたとへがたない。こゝで心よき休憩を取り、やがて揮心の力でピツケルを次の岩根に打ち込まふと思ふ。



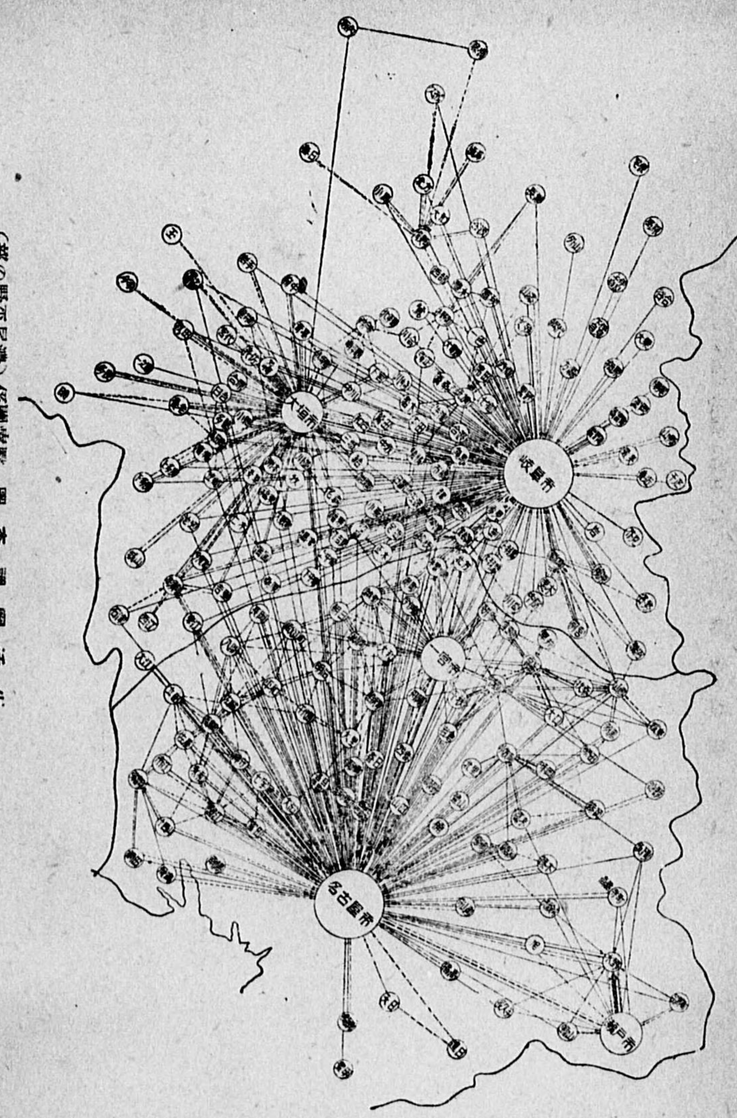
（都の野平尾濃）保關、會演講、業教　國蒙圖圖活生



生活圏調査圖　映畫關係（濃尾平野の部）



生活圏調査圖　買物（嫁入仕度）關係（濃尾平野の部）



（部の野平尾調）係圖狀態　圖　產　調　圖　法　生

皇國都市の建設（二、〇〇〇部發行）

昭和十九年　三月十六日　印刷
昭和十九年　三月二十日　發行

著者紹介——東大工學部土木科卒業
東京都計畫局道路課長
東大第二工學部講師

著作者　石川榮耀
東京都豐島區椎名町一ノ一八八三

發行兼印刷者　堀江關廳
東京都小石川區諏訪町五五

發行所　常磐書房
東京都小石川區諏訪町五五
電話　小石川一三一六
振替　東京七一七五八
日本出版會々員一二〇五二二

（認承會版出）
400245

定價㊀六圓七十錢
特別行爲稅相當額　三十錢
賣價七圓

配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

ト工/S--39

常磐書房版

終